慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	観音松古墳の研究1：墳丘及び墳丘外施設の復元
Sub Title	Studies of the Kan'nonmatsu Tumulus （１）：Estimative Reconstruction of Shape and Size of the Burial Mound and the Features Surrounding a Mound
Author	安藤, 広道(Ando, Hiromichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2009
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.78, No.4 (2009. 12) ,p.83(465)- 135(517)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20091200-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

観音松古墳の研究1
墳丘及び墳丘外施設の復元

安藤広道

はじめに

観音松古墳は、慶應義塾矢上キャンパスのある台地、通称「矢上台」の東南端に存在した前方後円墳である。現在、古墳のあった台地の先端は、大きく削られて矢上小学校の敷地になっており、台地が残る矢上キャンパス側もグラウンドによって地形が大きく改変されているため、今、現地を訪れても、かつてそこに古墳が存在していたことを示すものは何もない。

観音松古墳では、一九三八年、土取り工事で墳丘を含む台地の先端が大きく削られる際に、慶應義塾大学による主体部の発掘調査が行われ、前期古墳に特徴的な豊富な副葬品が出土した。その際出土した遺物の大半は、現在も民族学考古学研究室が保管している。ただし、この調査の記録をはじめ、墳丘の形態・規模、さらには出土遺物についても、これまでその詳細が公表されてこなかったため、観音松古墳は、次第に実態の不明な古墳として扱われるようになっていき、近年では研究の対象になることもめっきり減ってしまっていた。

筆者は、慶應義塾大学文学部教授高山博、経済学部教授松原彰子らとともに、二〇〇五年度より、継続的に慶應義塾日吉キャンパス・矢上キャンパス内の弥生時代・古墳時代の遺跡の確認調査を実施している。その一環として、二〇〇六年に矢上キャンパス東南端の小規模な発掘調査を行ったところ、観音松古墳の周壕の可能性のある大規模な落ち込みを発見することができた。また、併せて実施した慶應義塾保管の古い地形図の調査によって、観音松古墳の墳丘規模や形態、墳丘の方向等を推測し得

る、きわめて重要な手掛かりを入手した。

これらの調査によって、これまで不明であった観音松古墳の墳丘と墳丘外施設の姿が明らかになってきたわけであるが、その成果は、日吉台・矢上台の弥生時代～古墳時代の大規模な集落遺跡群との関連も含め、東日本の古墳時代研究において、非常に重要な意味をもつものと考えられる。

そこで本稿では、二〇〇六年に実施した発掘調査と地形図の調査成果の報告を行い、その成果に基づいた観音松古墳の墳丘、墳丘外施設についての、現在の知見をまとめておきたいと思う。なお、筆者は、ここで報告する墳丘等に関する研究と合わせて、主体部出土遺物の分析も進めているが、その成果については、今後、本稿の続編として報告していく心算である。

一、本研究以前の観音松古墳をめぐる研究状況

先述のように、観音松古墳では、一九三八年、台地の先端が削られる際に、慶應義塾大学による緊急的な発掘調査が実施されている。筆者は、二〇年以上前から、この発掘調査の日誌、図面、写真等の記録類を探し続けており、近年では慶應義塾の事務書類の保管場所等でも探索を行っているが、今のところ、福澤センターにて予算・会計関係の書類を発見しただけに留まっている。したがって、この発掘調査の成果については、これまでに発表された文献から推測していくほかない。

a．調査成果についての初出文献

発掘調査の内容及び出土遺物等が記された最初の文献は、一九五五年の清水潤三氏による「日吉に於ける考古学研究史」である（清水一九五五）。これは調査に参加していた可能性の高い人物（調査当時二二歳）による唯一の文章であり、かつ執筆当時、清水氏が出土遺物を管理していたと考えられる点でも注目すべきものである。入手しにくい文献であるため、以下、観音松古墳に関わる記述全文を引用しておく。

「昭和一三年春秋二回に亘って高校野球場のある丘陵南端の本古墳がやはり土木工事によって崩されたので、その寸前に調査が行われた。この古墳も長径八六ｍの前方後円墳で、プランも加瀬山白山古墳とよく似ている。中央に大型頑丈につくられた粘土槨があり、南側に偏り、それより上方に更に一ヶの粘土槨ある点も白山古墳と酷

似している。北側と前方部は土木工事のため未調査に終わったが、粘土槨などはなかったらしい。出土品は大形良質の内行花文鏡、銅鏃、紡錘車、鉄斧、砥石、小形ではあるが質のよく、形の整わない勾玉などの年代の古さを示すものがあり、滑石製の玉類の多いのも注意された。恐らく上記古墳（筆者註：矢上古墳、加瀬白山古墳、第六天古墳）の中で最も年代のさかのぼるものと見てよかろう。

これら矢上、白山、観音松、三古墳の出土品は関東地方としては稀に見る優秀な遺物であり、戦後の調査が進んでも、比肩するものを見ないほどで特に鏡のすぐれた点が目立ち、本塾考古学研究室のケースの中で異彩を放っている。」

この文章には、八六mという全長の具体的な数値が記されているほか、観音松古墳の墳丘形態、埋葬施設、副葬品に関わる注目すべき情報が含まれている。墳丘長については、観音松古墳の発掘調査予算要求書に測図費が計上されていることから、調査の際に測量した図から導き出した数値であった可能性が考えられる。

b．観音松古墳の基本文献としての『横浜市史』第一巻

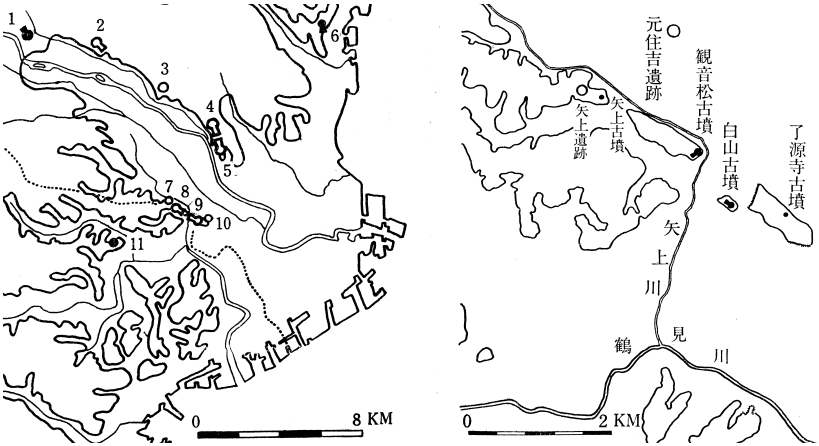
清水氏の文章の三年後、一九五八年に『横浜市史』第一巻が刊行され、そのなかに観音松古墳の墳丘、埋葬施設、副葬品に関する記述がみられる（甘粕・和島一九五八）。該当部分の執筆者は、甘粕健氏と和島誠一氏であるが、先述の清水氏の文章よりも情報量が多く、特に墳丘の主軸方向を示す図や副葬品の員数、銅鏃、紡錘車形石製品の実測図などは、この文献が初出である。先述の清水氏の文章があまり知られていなかったこともあり、この『横浜市史』が、以後、観音松古墳に関する基本文献として扱われることになった。

その内容についてまとめておくと、墳丘に関しては、まず墳丘長を、加瀬白山古墳と併記するかたちで長径約九〇mと記している。主軸方向については、広範囲に及ぶ古墳の分布図のなかではあるが、後円部を北東に向けた図（第三二図、本稿第一図右）と、北西に向けた図（第三九図、本稿第一図左）が掲載されている。埋葬施設に関しては、「主体となる粘土槨の外に、もう一つの」「構造内容ともに、主体構造とくらべると著しく粗末な」「ものが並行して設けられていた」（九四頁）と記

す。一方、副葬品については、表中（第三二図附表）に、内行花文鏡一、碧玉製紡錘車三、銅鏃三、硬玉製勾玉一、小形勾玉四、算盤玉一、管玉二〇余、ガラス小玉若干、直刀一、鉄斧頭一と、具体的な員数が挙げられている点が注目される。

墳丘長はさておき、主軸方向については、二通りの方向が図示されているように、甘粕氏、和島氏ともに正確な情報を持っていたわけではなかったようである。後述するように、この主軸方向の図はともに誤っている。『横浜市史』が刊行された時点では、まだ観音松古墳の墳丘の一部は残存しており、測量を実施すれば主軸方向を明らかにすることができたものと思われる（矢上小学校の建設時期からみて墳丘の残存部分が破壊されたのは一九七〇年前後）。また、清水氏が主軸方向を知っていたことも間違いないだろう。いずれにせよ、『横浜市史』の図は、そうした調査や情報収集を経ずに作成されたとみていいが、とはいえ、ここで主軸方向が具体的に示されたことによって、以後の文献では、これらの図のどちらかの方向が図示されることになった。

一方、副葬品の記述についても、清水氏の文章との微妙な差に注目しておかなければならない。少なくとも副



第１図　『横浜市史』に記された観音松古墳の主軸方向（左図は８が観音松古墳）

葬品の員数や清水氏の記述にはない遺物が記載されている以上、ここでの記述が、清水氏の文章ではなく、それ以外の情報源によって書かれたことは明らかである。一方、清水氏の記述にある砥石の存在や滑石製玉類が多いことが記されていない点をみると、清水氏の文章については全く参照していなかったようである。

甘粕氏・和島氏の記した副葬品の情報のうち、その一部が実際の資料調査によるものであったことは、銅鏃と紡錘車形石製品の実測図だけでなく、勾玉、算盤玉、管玉の員数が、現在保管されているものと一致することからも、うかがい知ることができる。ただ、そうでありながら、中央粘土槨出土というラベルのついたガラス製小玉八五点や、上方の粘土槨出土とみられる滑石製臼玉一八点などの記述はない。これらの遺物のラベルは清水氏在職中から付されていたことが確実であるため、この点からも、資料調査の時点で清水氏から充分な情報を得ていたわけではなかったことがうかがわれる。

なお、清水氏の文章や『横浜市史』に記されている鉄製品と砥石については、現在、その所在を確認できないため、加瀬白山古墳の鉄製品等と同様に戦災で失われた可能性が高い。そうしたなかで、『横浜市史』に清水氏の記述にない直刀が記載されていることをみると、その情報は、他の観音松古墳の調査参加者から得たものである可能性が考えられることになる。いずれにしても、『横浜市史』の記述は、必ずしも当時知り得た情報を網羅したうえで書かれたものではなかったと結論付けてよさそうである。

c．その後の文献で加わった情報

甘粕健氏は、一九六六年刊行の『日本の考古学Ⅳ』所収の、久保哲三氏との共著「関東」（甘粕・久保一九六六）の表中で、観音松古墳の墳丘長を七二mと記している。七二mという具体的な数値が示されている点からみて、甘粕氏が、『横浜市史』執筆後に墳丘長に関わる何らかの情報を得ていたことが推測できる。その一方で、本文中では、他の古墳の墳丘長は明記しながら、観音松古墳については記しておらず、表中の数値が必ずしも信頼に足る情報でなかったことが読み取れる。ただ、この文献で観音松古墳の墳丘長が七二mとされたことによって、以後の観音松古墳の記述では、墳丘長を七二mや八六mという具体的な数字で示したり、七二～八六mや七〇～九〇mなどと幅を持たせて示す例がみられるように

なった。いずれにしても、墳丘の実測図等が提示されることなく、それぞれの数字の情報源も明らかにされなかったため、以後、どの数値に信頼を置くべきかの判断が難しくなってしまうことになった。

一九七九年に刊行された『神奈川県史　資料編二〇考古資料』（神奈川県一九七九）では、『横浜市史』を参考文献として挙げていることもあり、墳丘長や、副葬品の種類と員数の情報も、『横浜市史』に準じた記述になっている。管玉の数が異なっているが、これは単純な誤植と考えられる。ただ、この文献には、銅鏃三点と紡錘車形石製品二点、やや大型の碧玉製管玉一点、硬玉製勾玉一点の実測図が掲載されており、この実測図に関しては、その原図（スケッチ）が、県史執筆者の一人である赤星直忠氏のいわゆる『赤星ノート』のなかにあることが判明している（古墳時代研究プロジェクトチーム二〇〇四）。『赤星ノート』には、このほか「内行花文鏡」一枚、「硬玉製勾玉・大型碧玉製管玉・紡錘車形石製品」一枚、「玉類」二枚の写真がある。これらのスケッチ、写真が何時とられたものかは不明であるが、写真に写った遺物のラベルが現在のものと同じであることから、戦前の調査時ではなく、おそらくは県史編纂に関わる資料調査によるものと考えられる。なお、この文献では、調査者として「保坂三郎ら三田史学会員」と具体的な名前が初めて公表されている。

その後、一九八四年には、世田谷区立郷土資料館の特別展『多摩川の古墳』図録（世田谷区立郷土資料館一九八四）において、内行花文鏡、銅鏃三点、紡錘車形石製品三点のモノクロ写真が初めて公開された。更に、二年後の一九八六年には、『古代のよこはま』（横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編一九八六）が刊行され、そこに内行花文鏡、銅鏃、紡錘車形石製品のほか、硬玉製勾玉一点、碧玉製大型管玉一点、碧玉製管玉八点、滑石製管玉六点、ガラス製小玉八五点のカラー写真が掲載されることになる。この図録は、多くの観音松古墳出土遺物が掲載されているだけでなく、写真・印刷の質が良好であることもあって、以後、『横浜市史』と並び観音松古墳の基本文献になった。

ただ、この図録に掲載された碧玉製大型管玉は、実は加瀬白山古墳西粘土槨出土のものである（柴田・他一九五三の写真図版一七参照）。その後発行された図録類でも観音松古墳出土遺物とされているので注意をしていただきたい。この大型管玉は、筆者が加瀬白山古墳出土で

あることに気がつくまで、観音松古墳出土遺物の箱に納められており、一方、加瀬白山古墳出土遺物の箱の中には、報告書に記載のない小さめの大型管玉が入っていた。先述の『赤星ノート』の写真にも、こちらが観音松古墳出土のものとして写っており、清水潤三氏の退職後、何かの機会にこれらが入れ替わってしまったようである。

なお、この図録には、「後円部近景　南東より　一九六三年ごろ撮影」とのキャプションのついた、観音松古墳の墳丘の写真が掲載されている。土取りされた法面の上部に、写り込んだ人物と比較して三m程度の盛土の存在が確認できるものである。現時点において観音松古墳の墳丘の姿を伝える唯一の写真というだけでなく、一九六三年ごろまで墳丘が残存していたことを示す貴重な写真であるが、後述するように、この写真に写っているのはキャプションにある後円部ではなく、前方部である。この部分を後円部とすると、『横浜市史』第三八図に示された主軸方向と一致することになる。つまり、そこで示された北東に後円部を向ける主軸方向は、この写真に写った墳丘部分を後円部と誤認したことによるものと考えられる。

以上のように、観音松古墳の墳丘や出土遺物については、清水氏以外の調査参加者による文章が残されていなかったこともあり、断片的な情報で書かれた『横浜市史』が基本文献となり、その後も出典や情報源が明示されないままに、新たな情報が付け加わっていくことになった。そのため、墳丘については、主軸方向のみならず、その規模についても、どの情報が正しいのかが判断できなくなってしまったのである。また、出土遺物についても、全体の種類と員数が正確に記されたものはなく、近年では、一部、他の古墳の遺物と入れ替わるなどの混乱がみられるようになってしまっていた。

d．観音松古墳の築造時期をめぐっての議論

さて、ここで、観音松古墳の墳丘、埋葬施設、副葬品等の基礎的な情報とは別に、その考古学的評価とも関わる、築造時期に関する現在までの知見をまとめておきたい。

先述の清水氏の文章では、観音松古墳と加瀬白山古墳を、墳丘の形態、埋葬施設、副葬品の特徴から「比較的古い古墳」と表現しており、観音松古墳は、副葬品に年代の古さを示すものがみられるとしたうえで、加瀬白山古墳に先行すると考えている。

続く『横浜市史』では、観音松古墳と加瀬白山古墳を、南関東最古の古墳として位置付け、その年代を、畿内での古墳文化の成立からしばらく経った四世紀末～五世紀初頭としている。両者の前後関係については、観音松古墳の副葬品は舶載青銅鏡や銅鏃、紡錘車形石製品がある一方で鉄製品が貧弱であり、加瀬白山古墳は、銅鏃、碧玉製品がなく、仿製鏡、鉄製品の種類と量が多いという点に注目し、観音松古墳の被葬者に司祭を兼ねる「共同体の族長」、加瀬白山古墳の被葬者に、仿製鏡の製作と鉄の入手ルートを独占的に掌握した「成長する地方豪族」を重ね合わせることで、観音松古墳→加瀬白山古墳という順序を想定した。

観音松古墳の時期については、以上のような清水氏や『横浜市史』の見解が長らく定説となっていた。一九八四年の『多摩川の古墳』や一九八六年の『古代のよこはま』のような、一般向けの展示図録でも同様の時間的位置づけがなされており、現在でもこの見解が広く流布しているように思われる。これに対し、近年では、主体部の構造や副葬品個々の編年的研究の進展とともに、観音松古墳を加瀬白山古墳よりも新しい古墳として位置付ける意見が多くなってきている（滝沢一九九二、遠藤一九九五、浜田一九九六など）。というより、すでに古墳時代研究者の間では、こちらの見解のほうが定説となっている感もある。いずれにしても、観音松古墳の時間的位置づけに関しては、出土遺物の詳細な検討が不可欠であるが、観音松古墳出土遺物の検討結果については稿を改めて論じることにし、以下、近年の古墳副葬品の研究成果の蓄積を踏まえ、観音松古墳の築造時期に関わる点に絞って概要を述べておきたい。

まず内行花文鏡は、岡村分類の四葉座Ⅲ式かⅣ式、後漢鏡五期（岡村一九九三）のものである可能性が高く、東日本においては同型式の鏡が、静岡県松林山古墳（後藤・他一九三九）、山梨県甲斐銚子塚古墳（山梨県埋蔵文化財センター一九八五）から出土している。意見の相違はあろうが、両古墳とも古墳時代前期後葉～末葉（和田編年四～五期・和田一九八七、前方後円墳集成編年Ⅳ期・広瀬一九九二）の古墳と考えられ、東日本における大型の舶載内行花文鏡の展開時期を示している。銅鏃は、縦鎬で逆刺、篦被のある大型品で、類例の少ないタイプであるが、最も類似する例としては前期末葉の三重県石山古墳出土例が挙げられる（京都大学文学部考古学研究室一九九三）。また、銅質の悪い点も、新しい時期の銅

鏃であることの傍証となろう（松木一九九二）。紡錘車形石製品も、凝灰岩質の石材を用いていることや底面がやや凸レンズ状になる点などに新しい時期の様相が認められ（北條一九九六）、滑石製の小型勾玉、管玉、臼玉、算盤玉の存在も、前期後葉～末葉に特徴的なものである（大賀二〇〇二）。

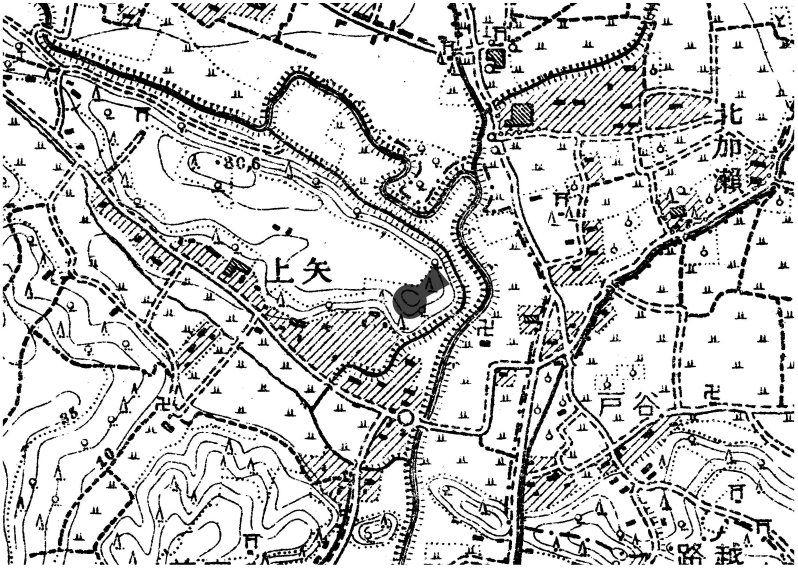
一方、加瀬白山古墳の築造時期については、中央の主体部から、新納編年3段階（新納一九九一）、岸本編年舶載3期（岸本一九九五）の三角縁神獣鏡と、岡村分類円座Ⅱ式、後漢鏡五期（岡村一九九三）の内行花文鏡が出土していること、さらに主体部の構造が木炭槨である点からすると、前期中葉（和田編年三期、前方後円墳集成Ⅲ期）に遡る可能性も考えられないことはない。ただし、後円部に追葬された二基の粘土槨から、前期後葉以降に出現する瑪瑙製勾玉や、観音松古墳のものと類似した滑石製管玉が出土している点に注目すれば、前方後円墳の複数埋葬の多くが比較的短期間で行われていることからしても、あまり時期を遡らせるのは不自然である。

このように、現在の古墳副葬品の研究成果からみると、観音松古墳は、古墳時代前期後葉～末葉（前方後円墳集成編年Ⅳ期）に位置づけられることになる。問題は加瀬白山古墳と観音松古墳の時間的前後関係であるが、この点については両者の中央主体部に共通する副葬品が少ないため、明確な結論を出すことは決して簡単ではない。とはいえ、加瀬白山古墳の中央主体部の副葬品構成が前期後葉に限定できるものではないこと、主体部自体も時期的に遡り得る木炭槨である点を考慮し、ひとまず本稿では、加瀬白山古墳を前期後葉（和田編年四期、前方後円墳集成編年Ⅳ期前半）、観音松古墳を前期末葉（和田編年五期、前方後円墳集成編年Ⅳ期後半）の築造と考えておくことにしたい。

二、発掘調査報告

a．調査に至る経緯と調査の目的

前章で述べたとおり、観音松古墳の墳丘については、一九三八年の調査参加者による詳細な報告がなかっただけでなく、その一部が残存していた時期にも、発掘調査や測量調査が行われることがなかった。そうしたなかで、関係者の多くが他界し、一九七〇年代には矢上小学校建設のために墳丘が完全に消滅してしまったため、観音松古墳は、古墳時代前期の大型前方後円墳という以外、そ



第２図　1909年の地形図から推測した観音松古墳の墳丘
上：1909年（大日本帝國陸地測量部２万分１『溝口』より）
下：現在（国土地理院2.5万分１『川崎』より）

の構築時期や、墳丘の形態・規模すらも不明確な、謎の古墳になってしまったわけである。

こうした状況のなか、筆者は、かねてより、観音松古墳破壊以前の二万分の一『溝口』図幅（大日本帝國陸地測量部一九〇九年測量）に記録された、矢上台の等高線と土地利用界から、観音松古墳の主軸方向や規模を推測し得ると考えてきた（第二図上）。

具体的に言うと、この図幅の矢上台の東南端には、台地をめぐる標高二〇メートルの等高線の上に、二五メートルを示す直径三〇～四〇メートルほどの円形の等高線が記録されており、当時この場所に大きな円形の高まりがあったことがうかがえる。この高まりの一帯は針葉樹林と広葉樹林になっており、針葉樹は円形の等高線から北東方向と西方向に延びていた。このうち、北東に延びる針葉樹林に注目すると、そこが、通常なら畠地として利用されるような台地の平坦面にみえるにも関わらず針葉樹林になっていること、そして畠との境界線が、円形の等高線に対する前方部のように、直線的に伸びていることがわかる。つまり、地形図を信頼すれば、この部分に、円形の等高線を後円部とし北東の針葉樹林部分を前方部とする、前方後円墳が存在していた可能性が想定できるわけである。

前期の古墳である観音松古墳の場合、清水氏の文章でも加瀬白山古墳との類似が指摘されているように、後円部に比して前方部が低かったと考えていい。とすれば、円形を呈する二五m等高線が後円部であった可能性が更に高まることになる。また、前方部が標高二五m以下であれば、等高線が地図上に表現されることはない。とはいえ、数mに達する高まりは畠地としては利用しにくかったはずであり、それ故に後円部と同様、針葉樹林として残されていたのであろう。

さて、この一九〇九年の地形図から推測した墳丘を、現在の地形図（国土地理院「川崎」二万五千分の一）に重ね合わせてみたところ、前方部の西側端部が、現在の矢上キャンパスと矢上小学校の境界の崖線付近に位置することが判明した（第二図下）。もちろん、地形図の精度は問題になるが、仮に上記の観音松古墳の主軸方向の推定が正しいとすると、周壕等の墳丘外施設の一部が矢上キャンパス内に残存している可能性が考えられることになる。

観音松古墳の周壕等の墳丘外施設の存在が確認でき、併せて墳丘の主軸方向や規模を明らかにする手掛かりが

得られれば、実態の不明であった観音松古墳やその出土遺物の学術的価値が高まることは間違いない。ましてや、一九〇九年の地形図から推測した主軸方向は、『横浜市史』以来、これまでの推定にはなかったものである。昨今では、逗子市長柄桜山1号墳・2号墳（逗子市教育委員会・他二〇〇九）、海老名市秋葉山古墳群（海老名市教育委員会二〇〇二）、厚木市ホウダイヤマ古墳（平本一九九九）など、神奈川県内を中心に前期前方後円墳の発掘調査が続いており、東日本における前期古墳の出現と展開をめぐる議論も活発化しつつある。そうした研究状況のなかで、観音松古墳の実態が少しでも明らかになることは、南関東地方のみならず東日本全体の古墳時代研究においても重要な意味をもつことになるはずである。

そこで、筆者が事業分担者として参加することになっていた、日吉キャンパス二〇〇五年度部門内調整費による教養センター委託事業「新しい教養授業の支援」、「日吉キャンパス内および周辺の遺跡（先史～近現代）情報のデジタル化」事業（研究代表者：文学部教授高山博）の一環として、矢上キャンパス東南端部の発掘を企画した。この事業は、慶應義塾日吉キャンパス、矢上キャンパス関係の遺跡、遺物を、研究・教育資源として、有効かつ積極的に活用していくことを目的としたものであり、観音松古墳関連の遺構、遺物が発見できればもちろんのこと、仮に確認できなかったとしても、キャンパス内における埋蔵文化財の遺存状況を把握するという点で、この発掘調査は事業の目的に適ったものとなる。

そこで事業関係者、及び日吉キャンパス、矢上キャンパスの関係部署と協議を重ね、二〇〇六年三月に発掘調査を行うことを決定した。二〇〇六年二月一一日付で神奈川県教育委員会に発掘届を提出し、二〇〇六年三月一一日～一五日に第一次調査を実施することになった。

一方、第二次調査は、この第一次調査において、観音松古墳の規模や形を推定する手がかりとなる周壕状の遺構が確認されたため、この遺構の規模、形態、構築時期等に関わる情報を得ることを目的として企画したものである。調査は、日吉キャンパス、二〇〇六年度部門内調整費・教養センター委託事業「日吉台地を中心とする土地利用（先史～近現代）の実態調査とGIS」事業（研究代表者：経済学部教授松原彰子）の一部として、また、二〇〇六年度高梨学術奨励基金による研究助成（「横浜市観音松古墳の研究」）を受けて実施した。二〇〇六年七月一六日付で神奈川県教育委員会に発掘届を提出し、

二〇〇六年八月一六日～二九日に発掘調査を行った。

b．遺跡の立地と周辺の弥生時代～古墳時代の遺跡

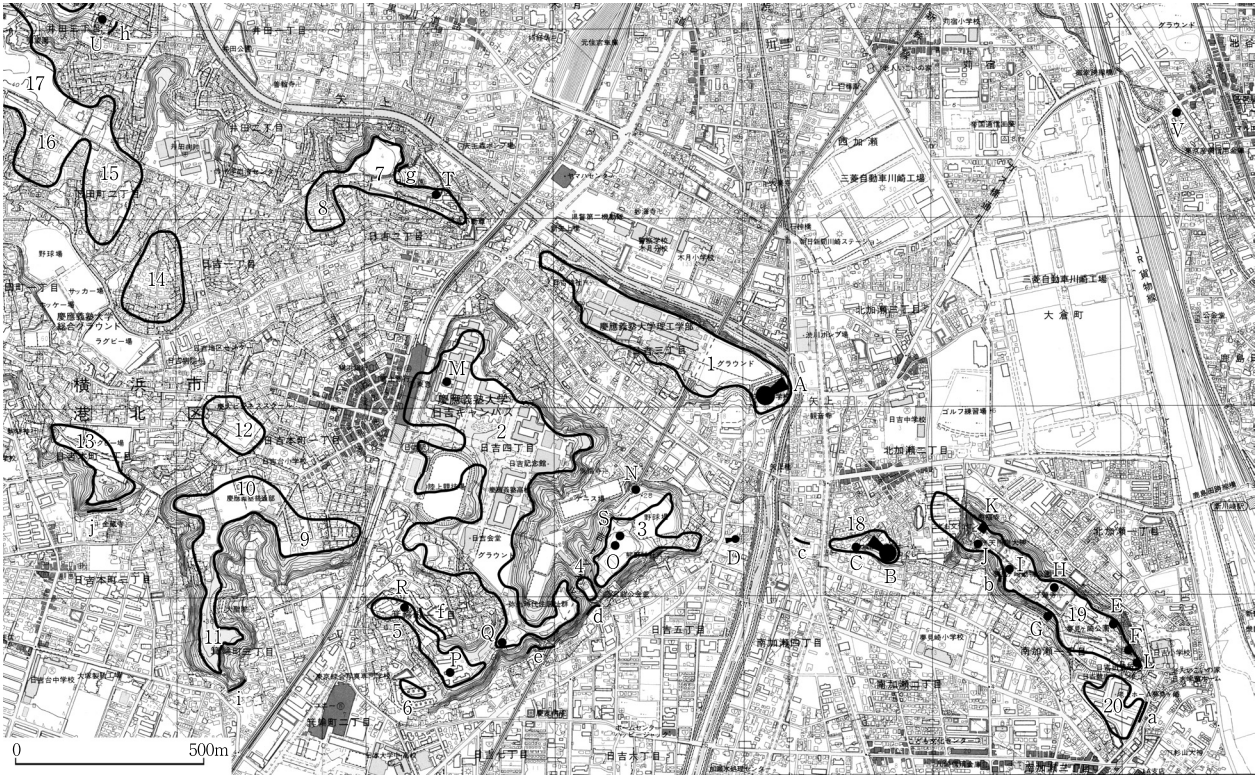
発掘調査地点は、横浜市港北区日吉三丁目一四、慶應義塾矢上キャンパスの東南端に位置する。矢上キャンパスのある高台、通称「矢上台」は、長さ約八〇〇m、幅約二〇〇m、標高二〇～三〇mの、東西に長い独立した台地である。この一帯は、多摩川と鶴見川の沖積地に挟まれた下末吉台地北半部の東端にあたり、南にある日吉台とは、矢上谷戸と呼ばれる東西方向の大きな谷によって隔てられている。

現在の矢上台は、キャンパス建設時の造成によって、台地上がほぼ標高二五m前後の平坦面となっているが、本来は、東側には標高二〇m強の段丘面（武蔵野面の一つ）が広がり、西側は一段高い段丘面を頂部とする、標高二〇～三〇mの緩斜面であった。台地の北側は、直下を流れる矢上川によって浸食され急傾斜となる一方、南側の矢上谷戸に面した斜面は比較的緩やかであり、台地の裾には扇状地崖錐等の微高地が見られる。なお、慶應義塾関係の諸施設が建設される以前、台地上の大半は畠地として利用されていたようである。

矢上台では、戦前より複数の竪穴住居跡や遺物が確認されていながら、観音松古墳を除いて、これまで充分な考古学的調査が行われてこなかった。一九四〇年の日吉台遺跡の報告に掲載された図には、矢上台東端部に四つ竪穴住居址のマークが記されている（西岡一九四〇）。これらは、その位置が観音松古墳に重なっており、観音松古墳が削られた際に発見されたものである可能性が考えられる。

戦後になると、矢上キャンパスの造成、諸施設の建設の際に、何度か竪穴住居址等の遺構が確認されていたようである。一九五五年には、矢上台の中央付近で、重複する弥生時代～古代の竪穴住居址二〇基が発見された（清水一九五八）。この際に回収された遺物は、現在民族学考古学研究室に保管されており、弥生時代中期後葉～古墳時代前期、古墳時代後期～平安時代の土器がみられる。また、一九七〇年代のグラウンド南のテニスコートの造成に際しても、複数の竪穴住居址の断面がみられたという。こうした竪穴住居址の確認記録からみて、矢上台には、ほぼ全体にわたり原始・古代の遺構が展開していたと考えてよさそうである。

『横浜市文化財地図』（横浜市教育委員会二〇〇四）で



第３図　日吉台・矢上台一帯の遺跡分布（国土地理院１万分１『武蔵小杉』より）

は、台地の東半部分、グラウンド一帯を港北区№四三遺跡（縄文（早期）・弥生（後期）・古墳・古墳以降）、台地の西側を港北区№四二遺跡（弥生・古墳以降）としている。ただし、現在のキャンパス内は、校舎やグラウンドの造成によって自然地形が大きく改変されていることから、既に破壊された遺跡として表示されている。

しかし、筆者らの近年の踏査によって、台地縁辺をはじめとする矢上キャンパス内の各所に、弥生式土器や土師器等の散布地点が存在することが明らかになってきた。それらは、グラウンド周辺からキャンパス内の広い範囲に及んでおり、矢上台に、依然、弥生時代～古代の遺構・遺物が広く遺存している可能性が高まってきたわけである。特に、グラウンド一帯は、後述するように盛土によって造成されていることが明らかになっており、その下に、キャンパス造成前の旧地形及び遺跡が良好な状態で保存されているものと考えられる。

さて、周辺の遺跡に目を向けると、矢上台の一帯は、先史時代、特に弥生時代～古墳時代の遺跡が集中する地域として知られている（第三図）。

まず、矢上台の南に隣接する日吉キャンパスのある台地（日吉台）には、弥生時代後期～古墳時代前期の巨大な集落遺跡群（2～6）と、小円墳からなる古墳群（M～S）が存在する。また、台地斜面には、横穴墓群（d～f）が展開していることも明らかになっている。

日吉台の遺跡は、戦前のキャンパス建設工事に際して発見され（柴田一九三三、森一九三三、橋本一九三四、西岡一九三六・一九四〇、清水一九四三）、当時としては国内最大の弥生時代の竪穴住居址が発見されるなど、東日本を代表する弥生時代集落遺跡のひとつと評価されていた。戦後、長らく遺跡は破壊されたものと考えられてきたが、キャンパス周辺部での緊急調査（諏訪下遺跡、水野・近藤一九八四、諏訪下北遺跡、諏訪下北遺跡発掘調査団一九九〇）や、近年の筆者らの発掘調査によって再び大きな成果が得られ始めており、少しずつではあるが、集落遺跡の実態が明らかになってきている（安藤二〇〇八b）。

先述のように、矢上台にも弥生時代中期後葉以降の集落遺跡が広く展開していたことが想定でき、そのほか、矢上台の東に位置する、矢上台とほぼ同規模の独立台地である加瀬台にも、弥生時代中期以降、大規模な集落遺跡が形成されていたようである（19、川崎市民ミュージアム一九九六、一九九七）。さらに、加瀬台の南には、

縄文時代前期、弥生時代中期・後期の貝塚として知られる南加瀬貝塚（20、Munro 1908）のあった台地が存在していた。また、矢上台、日吉台の西方の台地に分布する、矢上上ノ町遺跡（7、横浜市教育委員会一九八四）、矢上谷戸貝塚遺跡（8、横浜市教育委員会二〇〇四）、箕輪貝塚遺跡（9、谷川一九二五、一九二六）、慶應義塾普通部構内遺跡（10、清水一九五六）、殿袋遺跡（11、江坂一九八六）と呼ばれる諸遺跡にも、弥生時代～古墳時代の集落が広がっていたと考えられる。さらに、詳細は不明であるが、慶應義塾ビジネススクール一帯（12）、金蔵寺裏山（13）も弥生時代の遺物散布地になっている（横浜市教育委員会二〇〇四）。つまり、日吉台、矢上台、加瀬台を含めた径二キロ強の範囲の台地上は、弥生時代後期～古墳時代前期の居住域が集中する、人口密集地域になっていたわけである。

これら日吉台一帯の遺跡群を含む、多摩川南岸・鶴見川流域には、非常に多くの弥生時代後期～古墳時代前期の集落遺跡が分布する。例えば、矢上上ノ町遺跡の西では、下田西貝塚遺跡（16、下田西遺跡発掘調査団二〇〇二ほか）や、井田中原遺跡（17、竹石一九八八ほか）で、弥生時代後期～古墳時代前期の住居址等が発見されている。第三図の範囲からは外れるが、日吉台・矢上台と同様、多摩川及び鶴見川下流域の広大な沖積地に面した台地上には、住居址の密集する大規模な集落遺跡が数多くみられるようであり、なかでも日吉台の北西約四キロの影向寺一帯には、日吉台一帯と類似した弥生時代後期の集落の集中が認められる（野崎二〇〇二など）。ただ、影向寺一帯では、弥生時代後期前半までは朝光寺原式が主体となっており、その点で、朝光寺原式土器がほとんど見られない日吉台一帯とは様相が大きく異なっている。ほかには、日吉台の南約三キロの上台遺跡一帯にも、弥生時代後期の大規模な集落が形成されていた可能性がある（鶴見区史編集委員会一九八二、上台遺跡調査団一九九九）。

一方、鶴見川中・上流域では、中流域の広い沖積地に面した場所には、比較的規模の大きな集落遺跡が点在するものの、沖積地の面積が狭くなるにつれ、小規模な集落遺跡が多数群在するようになる（安藤・津村二〇〇七）。そのうち、上流域に展開する集落は、影向寺一帯と同様、朝光寺原式土器が主体となるものである。こうした多摩川南岸域～鶴見川流域に分布する多数の弥生時代～古墳時代前期の集落遺跡群のなかにあって、最も人

口が集中していたと考えられる日吉台一帯は、当時の人・モノ・情報の動きの中心となる集落群であった可能性が高い。

さて、矢上台と加瀬台の間には、小規模な台地があり、そこに全長約九〇ｍの前方後円墳である加瀬白山古墳（Ｂ）が存在していた。先述のように観音松古墳に先行する可能性の高い、ほぼ同規模の前方後円墳であり、この一帯における最古の大型前方後円墳である。観音松古墳（Ａ）の存在と合わせ、日吉台一帯の弥生時代後期～古墳時代前期の集落群との関係が注目される。なお、加瀬白山古墳の存在した小台地上も弥生時代～古墳時代の集落遺跡であることが明らかになっている（18、甘粕・和島一九五八）。

観音松古墳が形成された後、古墳時代中期になると、この一帯では大型の前方後円墳がみられなくなる一方で、加瀬台、日吉台及びその周辺地域に、比較的豊富な副葬品をもつものを含む、円墳・方墳が点在するようになる。なかでも矢上台から西に続く台地上にあった日吉矢上古墳（Ｔ、三田史学会一九四三）は、径二〇ｍほどの円墳とされているが、倭製神獣鏡二面を含む豊富な副葬品が出土したことで知られている。ただ、矢上上ノ町遺跡（7）では、日吉矢上古墳に近接した場所で規模の大きな溝状遺構が発見されており、仮にこれが日吉矢上古墳と関係するものだとすると、本来は、墳形も規模も異なる古墳であった可能性が考えられることになる。なお、加瀬台では、加瀬台4号墳（Ｈ、了源寺古墳、円墳）、8号墳（Ｋ、方墳）が、中期のものと考えられている（浜田一九九六）。

ところで、この時期の集落遺跡となると、日吉台一帯では、今のところ加瀬台で竪穴住居址が一基確認されているにすぎない。実は、台地上の集落の減少は、加瀬白山古墳や観音松古墳が築かれた古墳時代前期後半から始まっており、一方で、古墳時代前期・中期には、鶴見区№八五遺跡（横浜市教育委員会二〇〇九）や、宮内遺跡（村田一九八八）などのように、多摩川、鶴見川流域の自然堤防上に集落遺跡が認められるようになる。古くから指摘されていることではあるが（甘粕・和島一九五八）、この時期に、集落が沖積地の微高地に移動していた可能性が考えられる。

古墳時代後期～終末期になると、日吉台、加瀬台一帯に小規模な円墳が複数形成される（Ｍ～Ｑ：日吉台1～5号墳、柴田一九三三、Ｃ：第六天古墳、三田史学会

一九五三、E～G、I、J、L：加瀬台1～3、5、7、9号墳、浜田一九九六）ほか、多摩川流域の自然堤防上にも古墳が点在するようになる（V、塚越古墳、浜田一九九六）。また、加瀬台、日吉台の斜面には横穴墓群（a～f）が形成された（浜田一九九七、横浜市教育委員会二〇〇四、諏訪下北遺跡発掘調査団一九九〇）。周辺には、ほかに矢上上ノ町横穴墓群（g、横浜市教育委員会一九八四）、金掘横穴墓群（h、古江・他一九五六）、箕輪洞谷横穴墓群（i、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター二〇〇二）、金蔵寺裏横穴墓群（j、横浜市教育委員会二〇〇四）などが確認されている。なお、矢上台（1）や慶應義塾普通部構内遺跡（10）などにみられるごとく、再び台地上に集落が広く展開するようになるのも、この時期の特徴である。

円墳に関しては、日吉台における近年の調査で、新たに二基の周壕（R、S）が確認されているように（R：諏訪下北遺跡発掘調査団一九九〇）より多くの古墳が、この一帯に存在していたことが考えられる。また、横穴墓群についても、これまでに知られているのは、ごく一部に過ぎないと考えていい。なお、最近になって、日吉台三号墳（O、柴田一九三三、清水一九五五）、日吉台の東側にあった浅間山古墳（D、三田史学会一九五三）、日吉矢上古墳の西方にあった金堀山古墳（U、清水一九五五）の埴輪が民族学考古学研究室に保管されていることが明らかになった。これらはいずれも六世紀の埴輪であり、日吉台、矢上台一帯の古墳時代後期の古墳の展開を考えるうえで、今後重要な資料になっていくものと思われる。

なお、周辺の著名な遺跡としては、ほかに縄文時代前期の下組貝塚遺跡（13、玉川文化財研究所二〇〇六ほか、下田東貝塚遺跡（15、江坂一九三八ほか）等がある。

c．調査体制

発掘調査は、第一次、第二次ともに、高山博（慶應義塾大学文学部教授）・安藤広道（同助教授・現准教授）が中心となり、慶應義塾大学の学生の協力を得て実施した。そのほか、調査の企画・計画、現地指導に、二〇〇五年度、二〇〇六年度部門内調整費教養センター委託事業のメンバーである、松原彰子（慶應義塾大学経済学部教授）・櫻井準也（調査当時：慶應義塾大学文学部助教授）が参加した。

学生参加者は、以下のとおりである（五十音順）。

第一次調査　安達香織、大滝未知郎、五月女陽子、塩野智子、下島綾美、武内博志、千葉毅、若澤祐典

第二次調査　穴澤淳一郎、石田智裕、伊藤健介、入江峻介、岩田小笛、落合真澄、加藤忠弘、川副知美、五月女陽子、澤浦亮平、下島綾美、下田悠花、鈴木彩那、竹内智哉、千葉毅、逸見望、矢島祐介、

出土遺物、記録の整理作業は、安藤広道を中心に、佐伯史子、澤浦亮平、下島綾美、白石哲也、千葉毅が行った。

d．調査経過

第一次調査

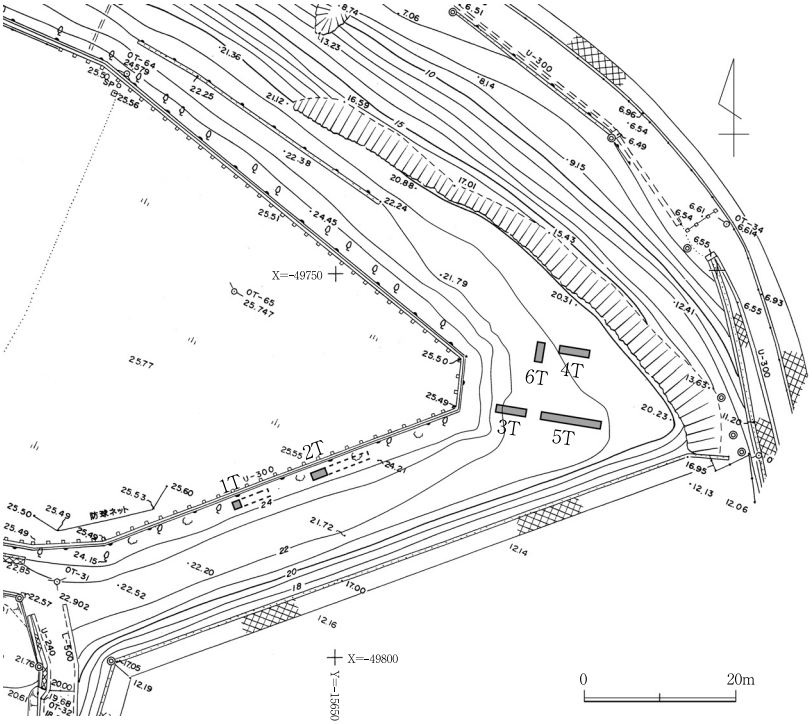
調査を計画した当初は、グラウンド内にトレンチを掘削することを考えていた。しかし、その後の現地踏査と大学職員からの情報によって、現在のグラウンド面が盛土で形成されていることが判明したため、グラウンド外側に僅かに残るテラス部分を本来の台地平坦面の残存部分と考え、そこにトレンチを設定することにした。

第一次調査は、二〇〇六年三月九日に現地での準備を開始し、三月一一日～一五日の六日間で発掘作業を行った。

三月九日。機材の搬入を行い、テラス部分の植栽を避けるように、五m×一mと八m×一mのトレンチ二本（第一トレンチ・第二トレンチ）を設定した。

三月一一日。二本のトレンチの南端部分一～二m程度から掘削を開始した。しかし、ともにコンクリート片を含む厚い盛土層が確認されたため掘削をあきらめ、当初、キャンパス建設時の人工的な削平面と考えていた、約三m下のテラスに二本のトレンチを設定、掘削を行った（第三トレンチ・第四トレンチ）。これらのトレンチでは、上層に第一・二トレンチと同様のコンクリートを含む厚さ五〇cm程度の盛土層が認められたものの、その下に古代以前と考えられる黒褐色土層が残存することが明らかになった。

三月一二日。引き続き第三・第四トレンチの掘削を行った。まずトレンチ全体の盛土を除去し、黒褐色土層の上面を検出した。その結果、黒褐色土層上面が、グラウンド方向にほぼ水平に伸びていることが確認され、標高二一m前後のこのテラスが、キャンパス造成前の本来の台地平坦面の状態を残した部分であること、また、その上部、標高二五mのグラウンド面までが、全て盛土である可能性が高まった。



第４図　トレンチ配置図

黒褐色土層の掘削を開始すると、第三・第四トレンチともに、均質の黒褐色土層が厚く堆積し、更に黒褐色土層全体に弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする土器片が含まれることが明らかになった。第四トレンチでは、この日のうちに黒褐色土層の掘削が終了し、漸移層～ソフトローム層面が検出された。

三月一三日、一四日。第三トレンチの黒褐色土層が予想以上に厚いことが判明したため、トレンチの中央部分のみを深掘りしたところ、標高約一九·五mの位置でローム層が検出された。第四トレンチ西半では、ローム層の状態を明らかにするため、ハードローム層の上面まで掘削を進めた。ともにそこまでで掘削を終了し、写真撮影後、土層図を作成した。

三月一五日。第一～第四トレンチの埋め戻しを行い、機材等を撤収し、作業を終了した。

第二次調査

第二次調査は、二〇〇六年八月一六日～二九日の土曜日、日曜日を除く一〇日間で実施した。

八月一六日。機材の搬入とテント等の設営を行ったうえで、第三トレンチの東側延長線上に八m×一mのトレンチ（第五トレンチ）を設定し、トレンチ内を四区に分けて掘削を開始した。ほどなく、第三トレンチと同様、トレンチ全体に地表面から数十センチ程度の盛土があり、その下に黒褐色土層が存在することが明らかになったため、まず盛土を除去し、黒褐色土面の検出を進めた。

八月一七日、一八日、二二日。盛土の掘削終了後、黒褐色土上面の記録をとったうえで、黒褐色土層の掘削を始めた。第三トレンチの調査所見から、黒褐色土が厚く堆積していることが予想されたため、トレンチの東西端部と二区東側の北壁側に、長さ二～三m程度の昇降用のステップを作って掘削を進めることにした。二二日までに、トレンチ全体を標高二〇mまで掘り下げた。

八月二三日、二四日。標高二〇m以下については、トレンチ内に三箇所の深掘区を設定して掘削することにした。うち一つについては、作業量の問題から地表下二mまでで掘削を止めたが、残りの二箇所では標高一九m前後でローム層面を検出した。また、第三トレンチ、第五トレンチの北方、第四トレンチに近い位置に、二m×一mの第六トレンチを設定、掘削を開始した。

八月二五日、二六日。第五トレンチの記録作業を進める。その過程で、トレンチ東南隅において、深さ五〇センチ程度の溝状の落ち込みを確認した。第六トレンチには、南半に現代の攪乱があったものの、盛土の下から黒褐色土が検出され、さらに標高二〇m強でローム層となることが明らかになった。この部分については、ローム層を標高約一九mまで掘削し、ローム層の観察を行った。

八月二九日。残った記録作業を済ませた後、トレンチを埋め戻し、機材等の撤収を行った。

e．各トレンチの調査結果

・第一トレンチ・第二トレンチ（写真三・四）

グラウンド東端部外側の、標高二四m強、幅一・五m程度のテラスに設定したトレンチである。当初第一トレンチは五m×一m、第二トレンチは八m×一mの規模で設定した。しかし、それぞれの南端部を一mほどの深さまで掘削し、その底面よりボーリング棒による調査を行った結果、地表面より二m以上の深さまで、コンクリートを含む盛土が続いていることが判明したため、そこで

掘削を止めることにした。

これらのトレンチからの遺物の出土は認められなかった。

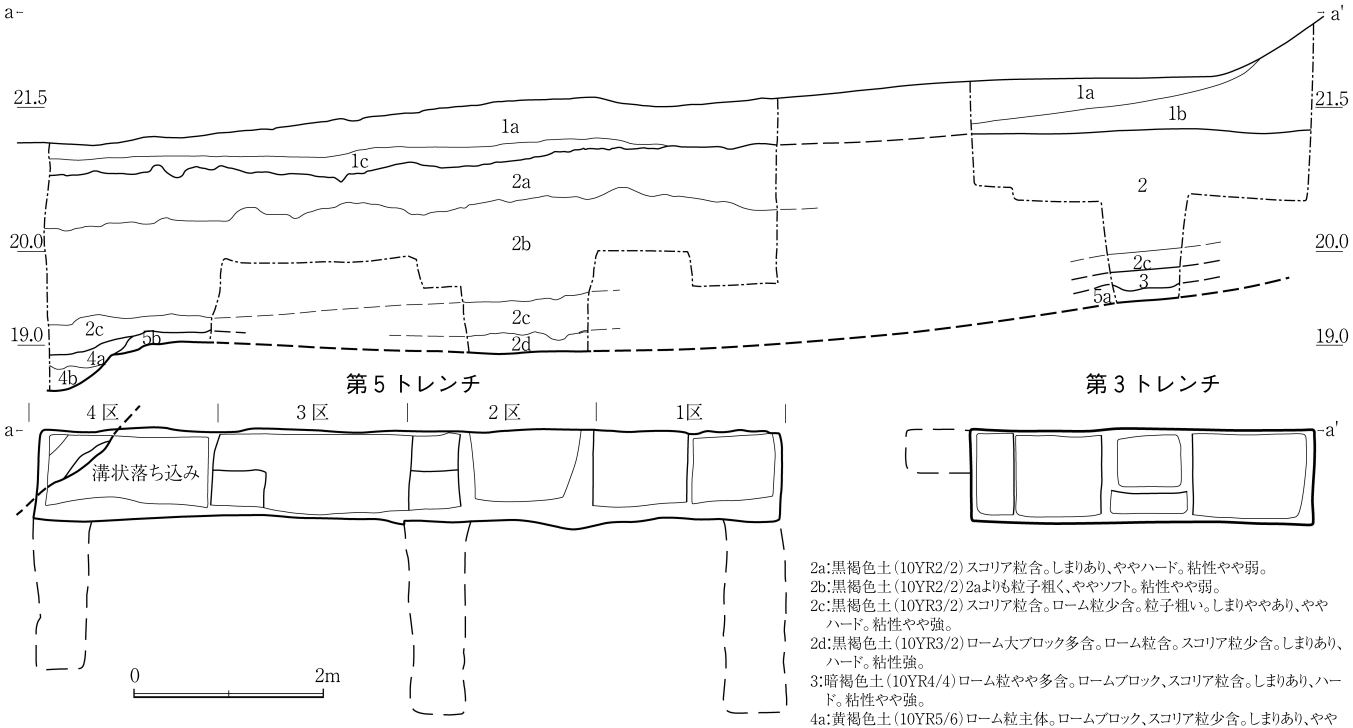
・第三トレンチ（第五図、写真五・六）

台地東北端のテラスのグラウンド側、標高二二m前後を計るあたりに設置した、四m×一mの東西方向のトレンチである。標高二〇・五m前後の深さまでトレンチ全体を掘り下げ、中央に一m角の深掘り区を設定し、標高約一九・五mで検出されたローム層上面まで掘削した。

本トレンチの土層は、標高二一・二m前後までは、グラウンド造成以後に盛られたロームブロック主体の盛土（1b層）であった。この盛土層の下には、スコリアを含む黒褐色土層（2層）が堆積し、その上面はほぼ水平面となる。そのため、標高の高いグラウンド側に向かって、盛土は急激に厚さを増していた。おそらく、グラウンド造成以前には、黒褐色土層上面から、それほど高くない位置に旧地表面が存在し、グラウンド造成時に、その土層上部を重機等で撹乱しながら、盛土をしていたものと推測できる。盛土層からは、少量のコンクリート片などとともに、弥生時代～歴史時代の土器破片が出土したが、こうした点も、上記の推定を裏付けるものと考えられる。

2層は、約一・二mほどの層厚をもつが、このトレンチ内では均質な特徴を示していたため分層を行わなかった。2層の下は、若干明るい黒褐色土層（2c層）、ローム粒・ロームブロックを含む褐色土層（3層）、ロームブロックの層（5a層）と、二〇センチ前後の厚さで土層が変化し、その下でローム層となる。ローム層上面は、明瞭な不整合面となっていた。2～5a層には、弥生式土器や土師器と考えられる土器破片が含まれていたが、須恵器や陶磁器は皆無であった。また、2層下部において、弥生式土器と古式土師器の破片が比較的まとまって出土している。

なお、本トレンチ底部で検出されたローム層は、後述する第六トレンチの深掘りの状況からみて、明瞭な黒色帯の下、ソフトローム層より一m以上下の層にあたると考えられる。武蔵野台地でいうⅥ～Ⅶ層に相当する可能性が高い。いずれにしても、本トレンチでは、立川ローム層の上部が認められず、ローム層上面が明瞭な不整合面になっていることから、2～5a層堆積以前に、この地点のローム層が大規模に削られていたことは間違いない。



1a:黒褐色土（10YR3/2）木根多含。ロームブロック少含。コンクリート塊含。しまりなく、ソフト。
1b:褐色土（10YR4/6）ローム大ブロック多含。部分的にローム粒主体。スコリア粒含。しまりあり、ハード。粘性やや強。
1c:黒褐色土（10YR2/2）ロームブロック、ローム粒多含。土丹ブロック、スコリア粒含。しまりなく、ソフト。粘性やや強。
2a:黒褐色土（10YR2/2）スコリア粒含。しまりあり、ややハード。粘性やや弱。
2b:黒褐色土（10YR2/2）2aよりも粒子粗く、ややソフト。粘性やや弱。
2c:黒褐色土（10YR3/2）スコリア粒含。ローム粒少含。粒子粗い。しまりややあり、ややハード。粘性やや強。
2d:黒褐色土（10YR3/2）ローム大ブロック多含。ローム粒含。スコリア粒少含。しまりあり、ハード。粘性強。
3:暗褐色土（10YR4/4）ローム粒やや多含。ロームブロック、スコリア粒含。しまりあり、ハード。粘性やや強。
4a:黄褐色土（10YR5/6）ローム粒主体。ロームブロック、スコリア粒少含。しまりあり、ややハード。粘性強。
4b:黄褐色土（10YR7/8）ローム粒主体。ロームブロック含。スコリア粒少含。しまりあり、ややハード。粘性強。
5a:黄褐色土（10YR6/8）ロームブロック。しまりあり、ハード。粘性やや強。
5b:黄褐色土（10YR5/6）ローム粒主体。ローム大ブロック多含。スコリア粒少含。しまりあり、ハード。粘性やや強。

第５図　第３トレンチ、第５トレンチ平面図・断面図

・第五トレンチ（第五図、写真九～一一）

第三トレンチの東側延長線上に、二ｍの間を空けて設定した八ｍ×一ｍの東西方向のトレンチである。トレンチの西端の標高は二一・五ｍで、このあたりも西から東に向かって緩やかに傾斜する。本トレンチは、第三トレンチ側から、二ｍごとに一区～四区に分けて調査を行った。

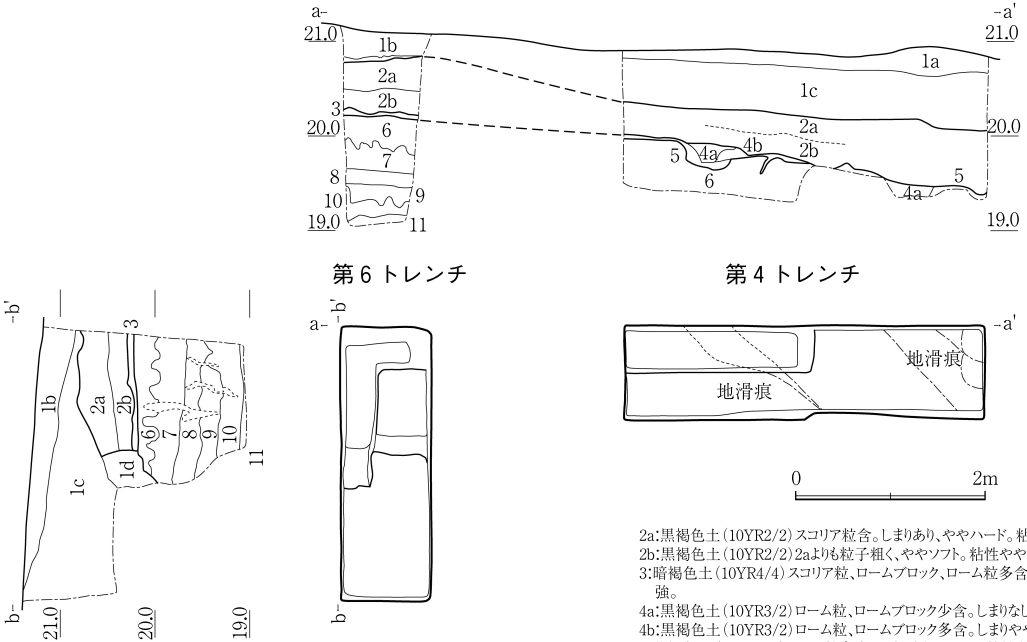
先述のとおり、本トレンチでは、全体を標高約二〇ｍまで掘削した後、一区の西側一ｍ、二区の西側一・五ｍ、四区全体に深掘区を設定した。うち、二区、四区の深掘区については、ローム層面まで掘削した。

本トレンチでも、最上層に二〇～五〇センチ程度の盛土があり、その下が厚い黒褐色土層（２層）となる。２層は、一・五ｍ前後の層厚があり、比較的均質な特徴を示していたが、このトレンチでは、内容物、硬度等の微妙な違いによって、２ａ、２ｂの二層に細分することが可能であった。

２ｂ層の下には、第三トレンチでも確認された２ｃ層があり、二区の深掘区では、その下にロームブロックを含む黒褐色土層（２ｄ層）を挟んでローム層となる。一方、四区の深掘区では、２ｃ層とローム層の間に、第三トレンチ５ａ層に類似したロームブロック主体の層（５ｂ層）が堆積していた。底面のローム層は、第三トレンチで検出されたものと同じ層であり、いずれの深掘区でも、ローム層面とその上の層との境は、明瞭な不整合面となっていた。ローム層面の標高は、四区よりも二区のほうが一〇センチ程度高く、ローム層面の標高の低い二区付近では、その上に直接黒褐色土層が堆積し、東西の微傾斜面（第三トレンチ、第五トレンチ四区）では、間にローム粒を多く含む層が挟まっていることになる。

さて、本トレンチ四区深掘区の東南コーナーでは、ローム層面を更に掘り込む深さ四〇センチ程度の落ち込みが検出された。ごく一部分を検出しただけであるが、壁面に傾斜があり、かつ肩が直線的に伸びている様子が認められたことから、北東―南西方向の溝状の遺構になるものと判断した。落ち込み内の土層は、黄褐色土層（４ａ層）とロームブロック層（４ｂ層）に分層され、４ａ層は先述の５ｂ層に被さるように堆積している様子がうかがわれた。

遺物は、２ａ層～５ｂ層から、弥生式土器、土師器の小破片が少量出土した。弥生式土器は、第三トレンチよりも明らかに小さなものが目立ち、大型破片は皆無であ



2a:黒褐色土(10YR2/2)スコリア粒含。しまりあり、ややハード。粘性やや弱。
2b:黒褐色土(10YR2/2)2aよりも粒子粗く、ややソフト。粘性やや弱。
3:暗褐色土(10YR4/4)スコリア粒、ロームブロック、ローム粒多含。しまりあり、ややハード。粘性やや強。
4a:黒褐色土(10YR3/2)ローム粒、ロームブロック少含。しまりなし、ソフト。粘性強。
4b:黒褐色土(10YR3/2)ローム粒、ロームブロック多含。しまりややなし、ややソフト。粘性強。
5:黄褐色土(10YR5/6)ローム粒多含。しまりあり、ハード。粘性強。漸移層。
6:黄褐色土(10YR5/8)ソフトローム
7:黄褐色土(10YR5/8)スコリア多含。ハード。
8:黄褐色土(10YR5/8)スコリア多含。黒色粒子含。ハード。
9:黄褐色土(10YR5/6)スコリア、黒色粒子多含。ハード。ブラックバンド。
10:黄褐色土(10YR5/8)スコリア、黒色粒子含。斑状。ハード。ブラックバンド。
11:黄褐色土(10YR5/6)スコリア、黒色粒子多含。ハード。3T、5T底面のローム層に類似。ブラックバンド。

1a:暗褐色土(10YR3/3)木根多含。しまりなく、ソフト。
1b:黒色土(10YR2/1)スコリア粒少含。しまりなし、ソフト。粘性弱。
1c:黒褐色土(10YR2/2)ローム粒、ロームブロック多含。スコリア粒、コンクリート塊含。しまりあり、ハード。粘性弱。
1d:黒褐色土(10YR2/2)ローム粒、ロームブロック多含。スコリア粒、コンクリート塊含。しまりややなし、ややソフト。粘性やや弱。

第6図　第4トレンチ、第6トレンチ平面図・断面図

った。一方で、第五トレンチの二層中には、第三トレンチではほとんど見られなかった、鬼高式以降の土師器片が僅かながら認められた。

・第四トレンチ（第六図、写真七・八）

第三トレンチから北に一〇m、東に三mの位置に設定した、四m×一mの東西方向のトレンチである。トレンチ西端の地表は、標高約二一mを計り、東方向に緩やかに傾斜する。以下の土層も基本的に同方向に傾き、下層ほどその傾斜が大きくなる。

第四トレンチにおいても、まず地表下に五〇～九〇センチほどの盛土が検出され、その下に、比較的均質な黒褐色土層（2層）が堆積していた。黒褐色土層の下には、ローム層との漸移層（5層）が認められ、以下、ソフトローム層（6層）、ハードローム層へと移行する。なお、漸移層上には地すべりによるものと思われる亀裂が三列認められた（4層）。

2層には、弥生式土器や土師器の小破片が少量含まれていた。本トレンチの土層は、漸移層以下は自然堆積層と判断できるが、漸移層より上に縄文時代～弥生時代の包含層が全く残っていないことからすると、やはり2層堆積前に漸移層付近まで掘削されていたと考えることができる。

・第六トレンチ（第六図、写真一二）

第三トレンチ東壁の北方延長線と、第四トレンチ北壁の西方延長線が交わる地点に設定した三×一mの南北方向のトレンチである。トレンチ西側で標高二一・二mを計る。トレンチ南半に大きな攪乱が入っており、土層の堆積状況を確認できたのは北側半分のみとなった。この部分については、標高一九・一mまで深掘りし、ローム層の状況を確認することにした。

本トレンチにも、地表下に三〇～四〇センチほどの盛土があり、その下に、他のトレンチと同様の黒褐色土層（2a層、2b層）が堆積していた。黒褐色土層の下には、ローム粒の混じる土層（3層）が薄く認められ、二〇・二m前後でソフトローム層（6層）となるが、その境界ははっきりとした不整合面になっていた。ソフトローム層の下は、ハードローム層（7層、8層）と明瞭な黒色帯（9層）へと続き、やや明るい層（10層）を挟んで一九・二mあたりで、第三、第五トレンチ底面のものと類似したローム層（11層）へと移行する。

2層には、他のトレンチと同様、弥生式土器や土師器の小破片が少量含まれていた。

f．検出された遺構

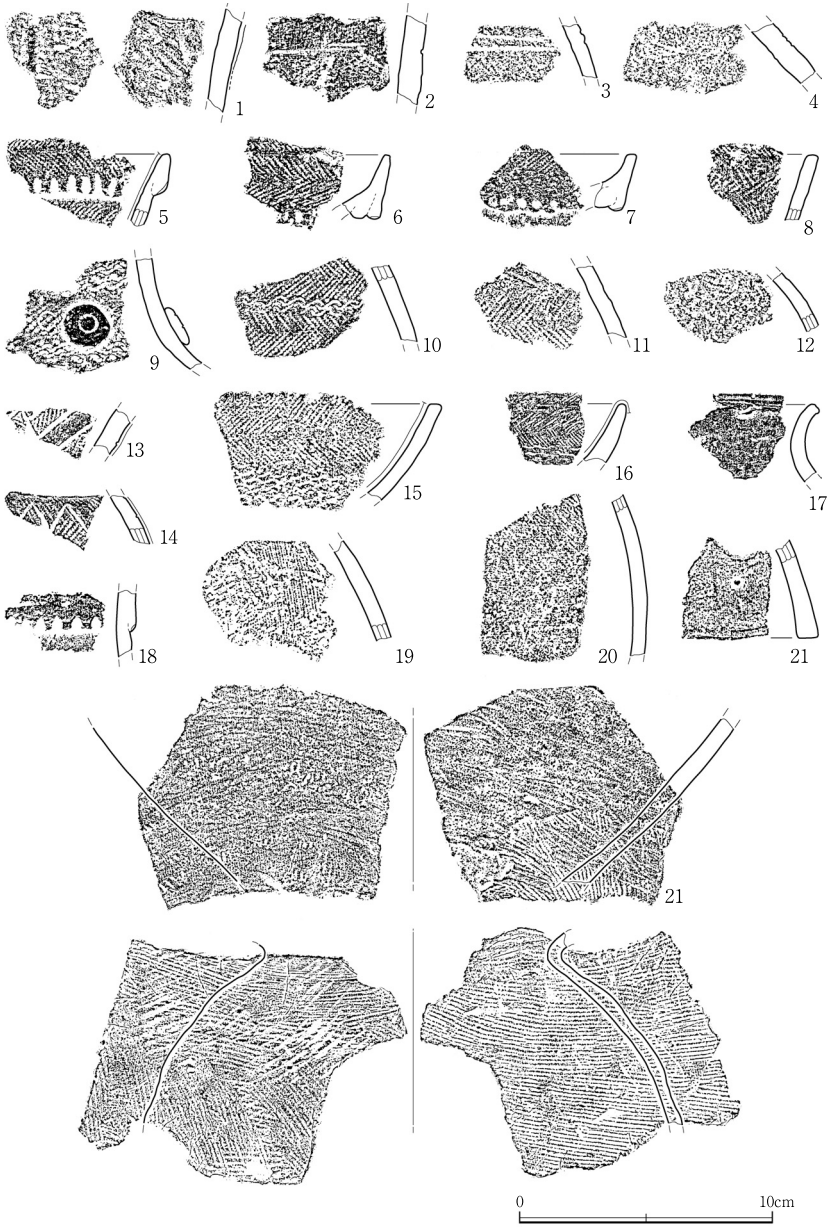
第三～第六トレンチでは、いずれも盛土下に、弥生式土器や土師器の小破片を含む黒褐色土層の厚い堆積が認められ、その下から漸移層～ローム層が検出された。また、第三、第五、第六トレンチでは、ローム層上面が明瞭な不整合面となっており、第三、第五トレンチでは、立川ローム層上部が存在しないことも明らかになった。このことから、第三～第六トレンチを含む一帯に、大規模な落ち込みの存在を想定することが可能となる。

第六トレンチの土層断面からみて、第三、第五トレンチで検出されたローム層は、ソフトローム層上面より一m以上下の層と考えられる。その上に厚さ二mに達する黒褐色土層が堆積していたことからすると、この落ち込みは、第三、第五トレンチ一帯において、当時の地表面から二m以上の深さまで掘削した大規模なものであったことになる。落ち込みの底面は、東に向かって緩やかに傾斜し、第五トレンチ二区あたりで最も深くなり、そこから四区にかけてやや浅くなる。また、第三トレンチと第四トレンチに、標高一九・五mを計る箇所が認められることから、落ち込みは、北東―南西方向に走る幅二〇m以上の大規模な壕状を呈していた可能性が高い。

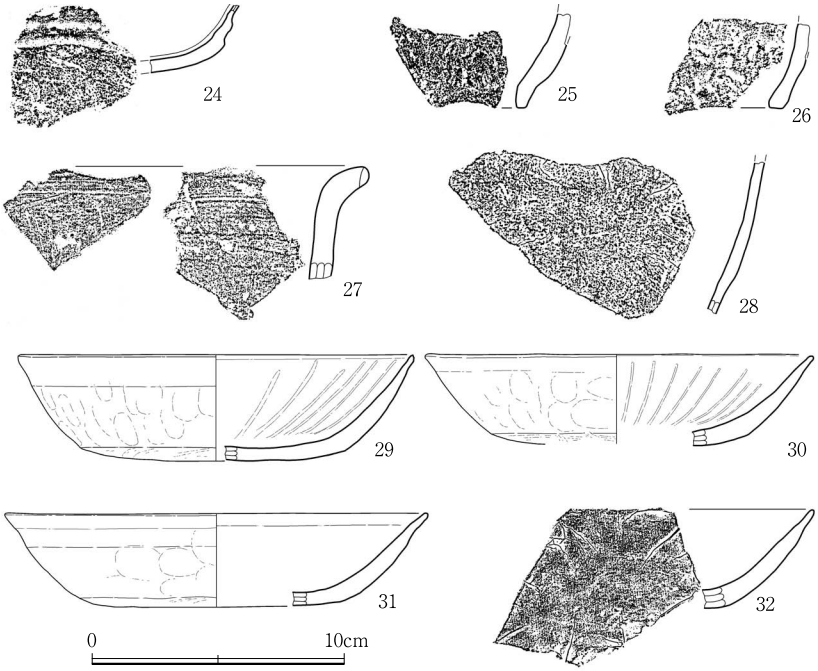
第五トレンチの東端では、この落ち込みの底面をさらに掘り込む溝状の落ち込みが検出された。ごく一部分の検出にとどまってはいるものの、この溝状の落ち込みの方向も、同様に北東―南西方向を示しており、また層位からも大規模な落ち込みとの有機的関係が想定できる。

さて、落ち込みの掘削時期であるが、この点については、落ち込みと直接関係する遺物が出土していないため、間接的な証拠から推測するほかない。まず、落ち込みの覆土である黒褐色土は、風化の度合いやスコリアの含有状況からみて、縄文時代以前や中近世以後の土とは異なるものと考えられる。

一方、出土した土器は、ほとんどが弥生式土器、土師器の細片であり、確実に中世以後のものと言えるのは、第五トレンチで出土した施釉陶器のごく小さな破片一片にとどまる。型式学的特徴を捉え得る土器破片には弥生時代後期、古墳時代前期のものが目立ち、器面調整の確認できる小破片にも、弥生式土器、古式土師器に特徴的なハケ目やミガキをもつものが多く見られる。第五トレンチや第六トレンチでは、確実な古墳時代後期～古代の土器破片が黒褐色土層中より出土しているが、あくまでも主体は、弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えて



第７図　出土遺物１（S=1/3）



第８図　出土遺物２（S=1/3）

よさそうである。

先述のとおり、今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の比較的大きな破片が第三トレンチ２ｃ層下部から出土しているのに対し、古墳時代後期以降の土器は第五トレンチから出土する傾向が認められた。このことは、落ち込みの掘削から埋没までの過程において、弥生時代後期～古墳時代前期の土器破片は、落ち込みの西側に流れ込みやすい状況にあり、古墳時代後期以降の土器はより東側に溜まりやすかったことを物語る。となると、古墳時代前期には落ち込み自体がまだ大きく窪んでおり、古墳時代後期には次第に窪みが小さくなっていた可能性が想定できることになる。

時期を絞り込む根拠としては十分なものとは言えないが、以上の点から、この落ち込みは、古墳時代前期を中心とする時期に掘削された可能性が高いとしておきたい。そうなると、その位置からしても、この壕状の落ち込みは、観音松古墳に関係したものである可能性が考えられることになる。

5	16	5T2区	2 b	浅鉢／高坏	口縁部	口唇 RL、口縁 LR←RL 羽状、下端自縄結節 2 段	横位ナデ→ミガキ	粗砂含	良好	外面：にぶい橙(7.5 YR 6/4) 内面：橙(7.5 YR 6/6)	
5	17	5T2区	2 b	甕	口縁部	ヨコナデ、口唇ヨコナデ	ヨコナデ	砂粒含	良好	外内面：橙(7.5 YR 6/6)	
5	18	3T	1 b	甕	胴部	横位ナデ、段、布目刻み	横位ナデ→ミガキ	細礫、砂粒含	良好	外面：明赤褐(5 YR 5/6) 内面：にぶい赤褐(5 YR 5/4)	
5	19	4T	2	甕	胴部	縦位・斜位ハケ	斜位ナデ	粗砂多含	やや良好	外面：橙(2.5 YR 7/6) 内面：にぶい橙(7.5 YR 7/4)	
5	20	3T	1 b	甕	胴部	横位ハケ→斜位ハケ	ナデ	砂粒多含	やや良好	外面：橙(5 YR 7/8) 内面：灰褐(5 YR 6/2)	
5	21	5T2区	2 d	台付甕	台部	ナデ	ナデ	砂粒含	やや良好	外面：にぶい黄橙(10 YR 7/4) 内面：にぶい黄橙(10 YR 7/3)	
5	22	3T	2 c	壺	胴部下半	縦位ハケ→横位ミガキ	斜位ハケ(2 種)輪積痕	細礫、粗砂含	良好	外面：橙(7.5 YR 6/6) 内面：橙(7.5 YR 7/6)	
5	23	3T	2 c	甕	頸部～胴部上半	斜位タタキ→横位ハケ→斜位ハケ、頸部ヨコナデ	横位ハケ、頸部ヨコナデ	粗砂多含、細礫含	やや良好	外面：褐(7.5 YR 4/3) 内面：にぶい黄橙(10 YR 7/4)	
6	24	6T	2 a	坏	頸部～胴部	頸部ヨコナデ、胴部ケズリ	ヨコナデ→赤彩	粗砂含	良好	外面：灰褐(7.5 YR 4/2) 内面：黄橙(7.5 YR 7/8)	
6	25	5T2区	2 b	甑	底部	ナデ→縦位ミガキ	ナデ	砂粒多含、細礫含	良好	外面：にぶい黄橙(10 YR 6/4) 内面：橙(7.5 YR 6/6)	26 と同一個体
6	26	5T2区	2 d	甑	底部	ナデ	ナデ	砂粒多含、細礫含	良好	外内面：橙(7.5 YR 6/6)	25 と同一個体
6	27	5T1区	2 c	甕／甑	頸部	頸部ヨコナデ、胴部ケズリ→ナデ	頸部ヨコナデ、胴部ケズリ→ナデ	粗砂含	良好	外面：にぶい黄褐(10 YR 7/4) 内面：橙(7.5 YR 7/6)	
6	28	5T2区	2 c	甕	胴部下半	縦位ケズリ→口頸部ヨコナデ	横位ケズリ→口頸部ヨコナデ	砂粒含	良好	外面：にぶい黄褐(10 YR 4/3) 内面：暗褐(10 YR 3/4)	
6	29	3T	1 b	坏	口縁部～胴部(1/3)	口縁部ヨコナデ、胴部指頭調整、底部ケズリ	ヨコナデ→放射状暗文	緻密、砂粒少含	良好	外面：黄橙(7.5 YR 7/8) 内面：橙(7.5 YR 7/6)	口径：15.7(復元)、高：4.1
6	30	3T	1 b	坏	口縁部～胴部	口縁部ヨコナデ、胴部指頭調整、底部ケズリ	ヨコナデ→放射状暗文	緻密、砂粒少含	良好	外面：橙(7.5 YR 7/6) 内面：橙(7.5 YR 6/6)	口径：15.3(復元)、残存高：3.6
6	31	3T	1 b	坏	口縁部～胴部	口縁部ヨコナデ、胴部指頭調整、底部ケズリ	ヨコナデ	緻密、砂粒少含	良好	外面：橙(7.5 YR 7/6) 内面：にぶい橙(7.5 YR 7/4)	口径：16.7(復元)、高：3.7
6	32	3T	1 b	坏	口縁部～胴部	口縁部ヨコナデ、胴部指頭調整、底部ケズリ	ヨコナデ	緻密、砂粒含	良好	外面：橙(7.5 YR 7/6) 内面：橙(7.5 YR 6/6)	

表１　出土遺物観察表

図	No	トレンチ	層位	器　種	部　位	外　面	内　面	胎　土	焼成	色調(土色帖準拠)	備　考
5	1	5T2区	2 b	深鉢	胴部	条痕、浮文	条痕	細礫、粗砂他含	やや不良	外内面：暗褐(2.5 YR 5/6)	
5	2	5T2区	2 b	深鉢	胴部	ヨコナデ→沈線	ミガキ	緻密、粗砂含	良好	外面：にぶい黄褐(10 YR 7/4) 内面：橙(7.5 YR 7/6)	
5	3	3T	1 b	壺	胴部上半	縄文(原体不明)、沈線２条	横位ナデ	砂粒多含	やや不良	外面：にぶい褐(7.5 YR 5/3) 内面：にぶい褐(7.5 YR 5/4)	
5	4	5T2区	2 b	壺	胴部上半	櫛(3本)波状→ミガキ	不明	砂粒多含	やや良好	外面：橙(5 YR 7/8) 内面：橙(7.5 YR 7/6)	
5	5	5T4区	2 a	壺	口縁部	貼付段、段 LR、口唇 RL、段下 RL、段下端ハケ刻み	ナデ？→赤彩→ミガキ	砂粒含	良好	外面：にぶい黄褐(10 YR 7/4) 内面：浅黄橙(10 YR 8/3)	
5	6	5T2区	2 b	壺	口縁部	粘土挟込複合、口唇 RL、口縁 RL→LR 羽状、複合部下端布目刻み	横位ナデ	細礫、砂粒含	良好	外面：橙(7.5 YR 7/6) 内面：にぶい橙(7.5 YR 7/4)	
5	7	5T4区	2 b	壺	口縁部	粘土挟込複合、口唇 LR、口縁 RL→LR 羽状、複合部下端棒状工具刻み	横位ナデ	砂粒含	良好	外内面：橙(7.5 YR 6/6)	
5	8	4T	撹乱	壺	口縁部	口唇 RL、口縁 LR→RL 羽状	不明	粗砂含	やや良好	外面：にぶい橙(7.5 YR 7/4) 内面：にぶい黄橙(10 YR 7/4)	
5	9	6T	2 b	壺	頸部	自縄結節縄文区画縄文帯(LR)→釦状貼付→竹管	ミガキ	粗砂多含	やや良好	外面：にぶい黄橙(10 YR 7/4) 内面：にぶい黄橙(10 YR 7/3)	
5	10	3T	2 c	壺	胴部上半	RL→LR 羽状２段、間に自縄結節２段	横位ナデ？	砂粒含	やや良好	外面：にぶい橙(7.5 YR 7/4) 内面：にぶい橙(7.5 YR 6/4)	
5	11	5T2区	2 b	壺	胴部上半	横位ナデ→LR→RL 羽状	斜位ナデ	砂粒含	良好	外面：橙(7.5 YR 7/6) 内面：にぶい黄褐(10 YR 7/3)	
5	12	3T	1 b	壺	胴部上半	縄文→沈線山形文→ミガキ→赤彩	横位ナデ	細礫、砂粒含	やや不良	外面：にぶい黄褐(10 YR 6/4) 内面：浅黄(10 YR 8/3)	
5	13	5T4区	2 b	壺	胴部下半	幾何学文、ミガキ→赤彩	横位ナデ	粗砂含	良好	外面：にぶい橙(5 YR 6/4) 内面：橙(5 YR 6/6)	
5	14	5T2区	2 d	壺	胴部上半	RL→LR→沈線山形文→赤彩	横位ナデ？	砂粒含	良好	外面：にぶい橙(5 YR 6/4) 内面：橙(5 YR 6/6)	
5	15	3T	2 c	浅鉢／高坏	口縁部	口唇 RL、口縁 LR→RL 羽状、下端自縄結節５段	横位ナデ→ミガキ→赤彩	粗砂多含	やや不良	外面：浅黄橙(7.5 YR 8/6) 内面：にぶい橙(7.5 YR 7/4)	

g．出土遺物（第七・八図、写真一三・一四）

出土遺物は、第三～第六トレンチ全体で、浅い遺物整理箱二箱ほどである。先述したように、その多くは弥生式土器、土師器の細片である。遺構との有機的関係をもつと考えられる遺物はない。第七・八図には、型式学的特徴の捉えられる破片を掲載し、表一に観察表をまとめた。

1は縄文時代早期野島式土器、2は後期の称名寺Ⅱ式あるいは堀之内式土器。3、4は弥生時代中期後葉、宮ノ台式土器である。4には櫛描波状文が描かれる。5～22は弥生時代後期～古墳時代前期の土器。壺形土器の文様には、自縄結節区画の羽状縄文帯（9・15・16）や沈線区画の山形文（11）、幾何学文（12）をもつものがみられる。21は比較的大型の壺形土器の底部付近の破片。22はタタキ調整の後に、内外面にハケ調整を施した甕形土器である。

23～26は、古墳時代後期の土器で、23は七世紀代に特徴的な有段口縁の坏形土器。24、25は同一の甑形土器の底部破片。27は、ケズリで器面を薄く仕上げた古代の甕形土器である。28～31は、盛土層から出土した坏形土器で、28、29には放射状暗文が施される。いずれもよく類似し、所謂北武蔵型の特徴をもつ。八世紀代のものであろうか。比較的近接して出土したことから、本来同一の遺構内のものであった可能性が高い。

h．発掘調査のまとめ

かつて観音松古墳が存在した矢上台の東南端は、台地の先端が古墳の墳丘とともに削られ、残った台地上もグラウンドが造成されるなど、大きく地形が改変された場所である。しかし、今回の発掘によって、このあたりのグラウンド面が四m前後にもなる厚い盛土によって形成されており、グラウンド外側に僅かに残る二一m前後のテラス状の平坦面に、グラウンド造成以前の旧地表面の状況が残っていることが判明した。したがって、このテラス部分からグラウンド下にかけての広い範囲に、先史時代以降の埋蔵文化財が良好な状況で残っている可能性が高くなった。

今回、このテラス部分に四本のトレンチを掘削したわけであるが、そこにおいて、古墳時代前期に掘削された可能性の高い、幅二〇m以上、深さ二m以上の規模をもつ、南北方向の壕状の落ち込みを発見することができた。落ち込み内には、底面をさらに掘り込む、同方向の落ち

込みも検出された。遺構の規模や掘削推定時期、さらに一九〇九年の地形図から推測した古墳の位置との関係から、この壕状の落ち込みは、観音松古墳に関係する周壕等の施設である可能性が高い。

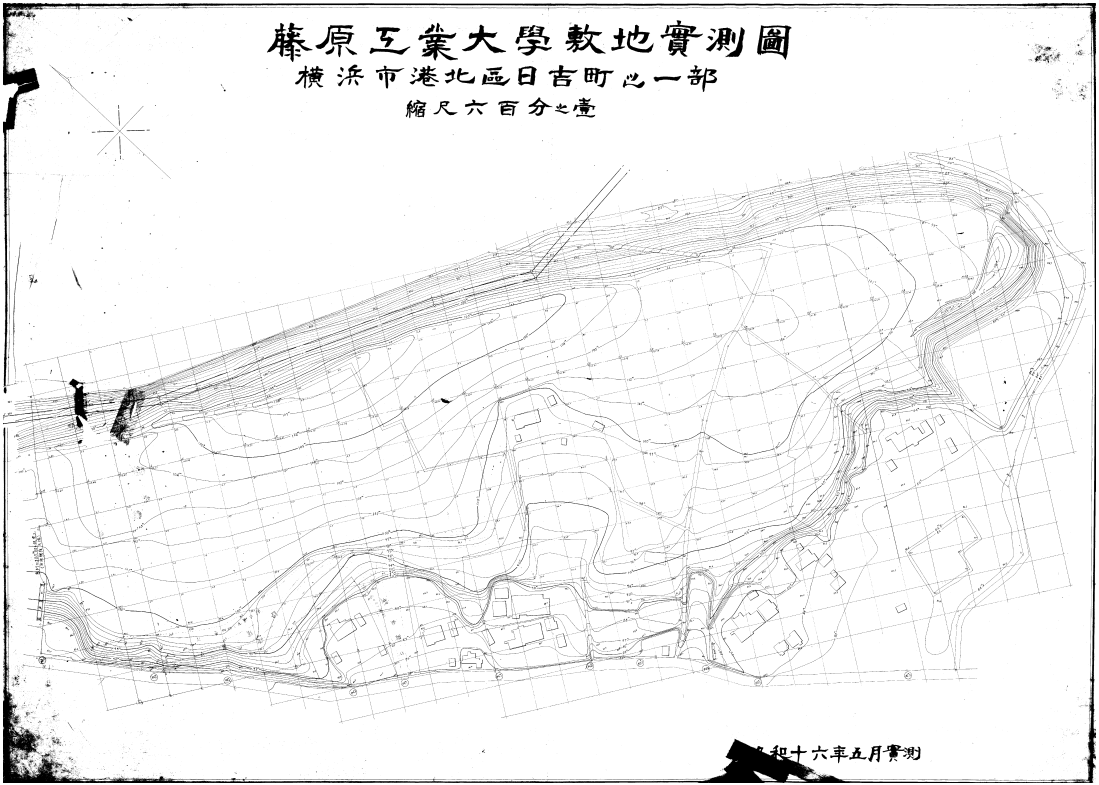
三、校地地図の調査成果

筆者は、ここ数年、慶應義塾に保管されているキャンパスの古い地形図等の探索を続けている。そうしたなか、発掘調査を行った二〇〇六年の秋に、「藤原工業大学敷地実測図」と記された、一九四一年五月測量の矢上台の六百分一地形図を発見した（第九図）。トレーシングペーパー状の薄手の紙にインクで地図情報を記した、原図と考えていい地形図であり、地形は一m等高線によって表され、地籍の境界や建物等なども細かく記された、きわめて詳細な図である（第九図）。現在の地形図との重ね合わせ作業についても、地形図に記された日吉神社の石段や地籍の境界を手掛かりにして、容易に行うことができた。

さて、この地形図が測量された一九四一年は、観音松古墳の調査が行われ墳丘が削られた年の三年後にあたる。そのため、地形図でもすでに矢上台の東端が大きく削られている。しかし、その削られた崖面に接して、明らかに前方後円墳の一部と分かる高まりが記録されていることが判明した。墳丘の八〇％程度が削り取られているものの、前方部の北コーナーからクビレ部にかけては比較的よく残存しており、後円部の輪郭の一部も残っている。地形図からは削られる前の台地の輪郭も読み取れるため、何とか墳丘の形態が復元可能となった。

墳丘の形態や、今回の発掘調査で確認された壕状の落ち込みとの関係については、後で述べることにするが、この地形図の発見によって、先述の二万分一地形図から推測した観音松古墳の主軸方向が正しかったことが証明された。また、地形図に記された崖面の形状との対比によって、『古代のよこはま』に掲載された写真が、台地の東側から前方部を撮影したものであることも明らかになった。この写真に写っている墳丘の高さも、等高線から読み取れる前方部残存部の高さ（三～四m程度）と一致している。

なお、この地形図では、標高が相対値によって表現されているが、標高の原点となっている日吉神社の石段が現在も残っているため、そこに海抜値を与えることが可



第9図　1941年測量の矢上台地形図

能となった。測量の結果、地形図で一〇〇とされた基準点の高さは、二二・五九四mとなることが判明した。となると、今回発掘したテラス付近にあたる台地の縁に九八、そこから三〇mほど西に九九と記された等高線があることから、この一帯は標高二〇・五～二一・五m程度となり、現在のテラスの標高と合致することになる。こうした点は、この地形図の正確さを傍証するとともに、テラスに旧地表面の状況が残っているとした今回の発掘調査結果とも整合する。

いずれにしても、この地形図の発見によって、長らく不明であった観音松古墳の墳丘を復元する大きな手掛かりを得ることができたわけである。

四、考　察

―観音松古墳の墳丘及び墳丘外施設の復元―

以上の調査成果から、観音松古墳の墳丘、墳丘外施設を復元すると、以下のようになる。

まず、観音松古墳の墳丘についてであるが、その復元にあたっては、今回発見した地形図から読み取れる、前方部北西の辺から後円部にかけてのくびれ部の形状と、前方部北西辺の長さが手掛かりとなる。くびれ部に近いあたりの僅かに残る後円部のカーブと、前方部北西辺のなす角度をみる限り、観音松古墳の前方部は柄鏡型にはならず、くびれ部から比較的大きく開く形であったことが推測できる。この点は、観音松古墳の時期が前期末葉であることと整合的である。

具体的な墳形の推定にあたっては、同じ古墳時代前期末葉の前方後円墳と重ね合わせてみるという方法が有効である。今回は、築造当時の墳形を比較的よく留め、かつ古墳の立地する地形による影響が少ないと考えられる前方後円墳との比較を試みてみた。比較に使用した古墳は、群馬県大鶴巻古墳、浅間山古墳（群馬県一九八一）、千葉県白山神社古墳、水神山古墳（白井二〇〇四）、東京都亀甲山古墳（大田区教育委員会一九九二）、神奈川県加瀬白山古墳（三田史学会一九五三）、ホウダイヤマ古墳（平本一九九九）、秋葉山1号墳（海老名市教育委員会二〇〇二）、山梨県甲斐銚子塚古墳（山梨県埋蔵文化財センター一九八五）の一〇基である。

その結果、甲斐銚子塚古墳の墳丘を、観音松古墳の前方部北西辺の長さに合うように縮小（五分の三）したものが、削られる前の台地の縁辺との関係を含め、最も良

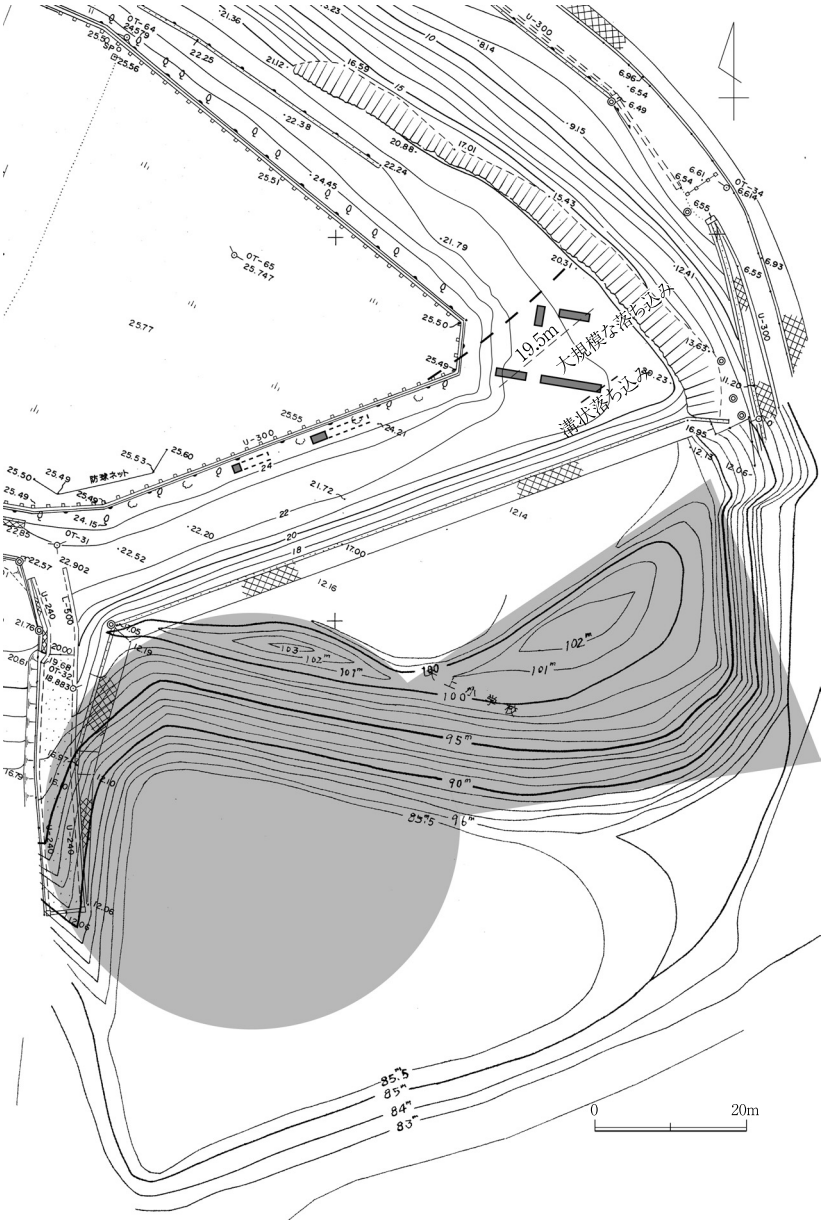
第10図　甲斐銚子塚古墳の墳丘との比較

好に重なることがわかった（第一〇図）。他の古墳では、水神山古墳、秋葉山1号墳、加瀬白山古墳（左右反転）が比較的近い結果を示したが、これらを除くと、いずれも後円部が南西側の台地縁辺を大きく超えてしまうことになった。もちろん、墳丘形成当時において台地の南西側が幾分か広くなっていた可能性は捨てきれないものの、その場合には、西側の三角形状に削り残された部分に、墳丘の一部が残っていてもいいはずである。その一方で、甲斐銚子塚古墳の墳形は、前期の前方後円墳のなかでも前方部が発達した部類に入るため、観音松古墳の後円部に対する前方部の比率が甲斐銚子塚古墳以上に大きくなっていた可能性は低いとみていい。

そこで、仮に前方部長と後円部径の比が甲斐銚子塚古墳に近かったとすると、墳丘長は約一〇〇ｍという計算になる。いずれにしても前方部西北辺の長さが四六～四七ｍに達している以上、全長が一〇〇ｍを下回ることは想定しにくく、本来の規模が、清水氏の記述にある八六ｍという規模を大きく超えるものであったことは間違いない。なお、観音松古墳の僅かに残された墳丘の情報から、甲斐銚子塚古墳との相似的関係にまで言及することは控えるべきかも知れないが、私は、甲斐銚子塚古墳を五分の三に縮小したものが、観音松古墳の墳丘残存部のみならず周囲の地形とも整合すること、さらに観音松古墳と甲斐銚子塚古墳が、ともに東日本の古墳では非常に稀な岡村編年後漢鏡Ⅳ期の大型内行花文鏡を副葬している点からみて、両者の墳丘に相似的関係があっても不思議ではないと考えている。その場合の観音松古墳の規模は、墳丘長一〇一ｍ、後円部径五五ｍ、前方部長四五ｍに復元できる。

一方、墳丘の高さについては、残存部の高さが前方部、後円部ともに四ｍ程度となっており、本来はこれ以上の高さをもっていたことが想定できる。しかし、一九〇九年の二万分一地形図では、五ｍごとの等高線が描かれながら、前方部には等高線がみられないため、この時点において前方部が標高二五ｍを大きく超えていたとは考えにくい。先述のとおり前方部付近の台地縁辺の標高は二〇・五ｍ前後であった可能性が高いため、前方部はおそらく五ｍを超えない比較的低平なものであったと推測できる。これに対し、後円部は一九〇九年の地形図に比較的大きな円形のコンタが認められることからみても、前方部に比して高くなっていたことは間違いない。つまり、この時点での観音松古墳の墳丘は、前期の前方後円墳に特徴的な前方部が低い墳形であったと考えていいことになる。

さて、最後に、このようにして地形図から復元した墳丘と、今回の発掘で確認された濠状の落ち込みとの関係をみてみると、落ち込み内の一九・五ｍのコンタラインや、第五トレンチの溝状遺構の方向が、前方部北西辺の墳裾ラインと一致することがわかる。この点は、濠状の落ち込みが、観音松古墳と関係するものであることを示す大きな根拠になると思われる。落ち込みの位置や形態、規模からみて、観音松古墳の周壕である可能性がまず考えられることになるが、その場合、前期古墳としてはやや特異な、幅三〇ｍを超える大規模なものを想定せざる



第11図　観音松古墳の墳丘、墳丘外施設の復元

を得なくなる（第一一図）。あるいは、第五トレンチで確認した溝状の落ち込みが周壕の肩となり、その西側の落ち込みは、台地を横切るように掘削した、堀割りのようなものであった可能性を考えておいたほうがいいかも知れない。

観音松古墳は、台地平坦面の縁辺部分に存在することから、古墳築造当時の地表面より高い部分は、全て盛土によって形成されていたと考えていい。仮に観音松古墳の墳丘規模を、全長一〇一m、後円部径五五m、高さ一〇m、前方部幅四〇m、前方部長四五m、高さ五mとすると、墳丘部分の盛土量は一万m^3を大きく超えていたことになる。あたかも台地の先端を切り離すように掘削された大規模な濠あるいは堀割りは、その掘削によって得られる土を墳丘の盛土として利用するとともに、墳丘の北西辺を広く二m以上掘り下げることで、視覚的に墳丘を高く見せるという効果を狙ったものである可能性が想定できることになる。

おわりに

以上、今回の発掘調査、地形図の調査によって、これまで詳細が不明であった観音松古墳の墳丘、墳丘外施設の復元が可能になってきた。復元された墳丘の主軸方向は、従来の文献のなかでは示されたことのないものであり、墳丘長が一〇〇mを超える可能性が高いという点や、規模の大きな堀割りあるいは周壕が存在していた点も、従来の見解を大きく変えるものになった。

近年の筆者らの調査によって、日吉台・矢上台一帯の弥生時代～古墳時代の集落遺跡群の様相が次第に明らかになってきており、弥生時代後期中葉～古墳時代前期前半において、この一帯が、鶴見川流域、多摩川南岸に展開していた集落群の中核的な地域になっていたことが推測できるようになった（安藤二〇〇八b）。その後、古墳時代前期後半には、これらの集落は急速に縮小するようであるが、それとともに、この地域に加瀬白山古墳と観音松古墳という二基の大型前方後円墳が築造されたことになる。その時間的、位置的な関係からも、両者の関係の究明が、今後の大きな課題になってくるものと考えている。つまり、日吉台・矢上台一帯は、弥生時代後期～古墳時代前期前半の地域社会の中核地域と、前期後半の大型前方後円墳の成立との関係を分析し得る、全国的にも稀有かつ重要な遺跡群として評価することができる

わけである。そうした意味を含め、今回の研究成果は、東日本の弥生時代、古墳時代の研究において、少なからぬ意義をもつものになったと評価したい。

ただし、今回、観音松古墳の墳丘の形態等について復元が可能になったとは言え、未だ多くの点が推測に留まっていることも事実である。入手した観音松古墳の予算要求書に記されているように、一九三八年の調査時に墳丘の測量が行われていた可能性は高く、今後も測量図を含めた、発掘調査の記録類の探索を続けていかなければならない。また、今回の報告は、墳丘の形態・規模、墳丘外施設の復元に焦点を絞ったため、古墳の時期決定において不可欠となる、主体部出土遺物の詳細、及び分析成果については触れることができなかった。この点については、いずれ本稿の続編として報告したいと考えている。

本稿は、本文中にも記したとおり、慶應義塾大学日吉キャンパス二〇〇五年度部門内調整費による教養センター委託事業「新しい教養授業の支援」、「日吉キャンパス内および周辺の遺跡（先史～近現代）情報のデジタル化」事業（研究代表者：文学部教授高山博）、同二〇〇六年度事業「日吉台地を中心とする土地利用（先史～近現代）の実態調査とGIS」事業（研究代表者：経済学部教授松原彰子）、及び二〇〇六年度高梨学術奨励基金による研究助成「横浜市観音松古墳の研究」の成果の一部である。

本稿を草するに当たり、二〇〇五年度、二〇〇六年度教養センター委託事業の代表者及びメンバーである、高山博氏、松原彰子氏、櫻井準也氏には、特に発掘調査時において、多大なご支援をいただきました。また、研究全体を通じて、多くの方々にご指導、ご教示を賜りました。ここにお名前を記して謝意を表します。

阿部祥人、穴沢咏光、池田治、岡本孝之、押方みはる、上條朝宏、車崎正彦、坂本彰、佐藤孝雄、杉本智俊、鈴木重信、竹内稔人、寺田良喜、都倉武之、西川修一、野崎欽五、浜田晋介、比田井克仁、水沢裕子、望月幹夫、山口徹、山田光洋（敬称略・五十音順）

引用・参考文献

甘粕健・和島誠一　一九五八「第三章　古墳時代」『横浜市史　第一巻』横浜市　九一―一五〇頁

甘粕健・久保哲三　一九六六「関東」『日本の考古学Ⅳ　古墳

時代（上）』河出書房新社　四二八―四九八頁
安藤広道　二〇〇八ａ「横浜市観音松古墳―前期大型前方後円墳の外部施設の調査―」『第三一回神奈川県遺跡調査・研究発表会』神奈川県考古学会　一―六頁
安藤広道　二〇〇八ｂ「横浜市日吉台遺跡群」『平成一九年度考古学講座　新神奈川・新弥生論』神奈川県考古学会　七九―八八頁
江坂輝彌　一九三八「横浜市神奈川區下田町東第三號貝塚に於ける土器について」『考古学雑誌』第二八巻第五号　日本考古学会　五五―六〇頁
江坂輝彌　一九八六「先史原史時代遺跡踏査の思い出」『港北区史』港北区郷土史編さん刊行委員会　七七九―七九五頁
海老名市教育委員会　二〇〇二『秋葉山古墳群第1・2・3号墳発掘調査報告書―第5～9次調査―』
遠藤秀樹　一九九五『古墳時代の神奈川』川崎教育文化研究所双書№三二
大賀克彦　二〇〇二「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　福井県清水町教育委員会　一―二〇頁
大田区教育委員会　一九九二『田園調布本町貝塚発掘調査・国史跡亀甲山古墳測量調査』大田区の埋蔵文化財一二集
岡村秀典　一九九三「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第五五集　国立歴史民俗博物館　三九―八二頁
神奈川県　一九七九『神奈川県史　資料編二〇考古資料』
上台遺跡調査団　一九九九「上台遺跡」『平成九年度　文化財年報（埋蔵文化財その一六）』横浜市教育委員会　二九―一〇七頁
川崎市　一九八八『川崎市史　資料編一』
川崎市市民ミュージアム　一九九六『加瀬台古墳群の研究Ⅰ』川崎市民ミュージアム考古学叢書三
川崎市市民ミュージアム　一九九七『加瀬台古墳群の研究Ⅱ』川崎市民ミュージアム考古学叢書三
岸本直文　一九九五「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」『考古学研究会四〇周年記念論集　展望考古学』考古学研究会　一〇九―一一六頁
京都大学文学部考古学研究室　一九九三『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館図録第六冊
群馬県　一九八一『群馬県史　資料編三』
後藤守一・他　一九三九『靜岡縣磐田郡松林山古墳發掘調査報告』磐田郡御厨村郷土教育研究会
古墳時代研究プロジェクトチーム　二〇〇四「考古学の先駆者赤星直忠博士の軌跡（一）―通称「赤星ノート」の古墳時

代資料の紹介―」『研究紀要9　かながわの考古学』財団法人かながわ考古学財団　五五―六六頁
柴田常恵　一九三三「日吉臺古墳發掘調査報告」『史学』第一一巻第一号　三田史学会　一〇五―一一四頁
清水潤三　一九四三「昭和十五年度日吉彌生式竪穴調査報告」『史学』第二一巻第二号　三田史学会　七七―一一〇頁
清水潤三　一九五五「日吉に於ける考古学研究史」『Archaeology』二一号　慶應義塾高等学校考古学研究会　一―六頁
清水潤三　一九五六「日吉普通部校庭における土師器出土竪穴の調査」『史学』第二八巻第三・四号　三田史学会　一二四―一四一頁
清水潤三　一九五九「神奈川県横浜市日吉遺跡」『日本考古学年報』八　日本考古学協会　七九頁
清水潤三　一九六五「神奈川県横浜市日吉町遺跡」『日本考古学年報』一三　日本考古学協会　一二七頁
下田西遺跡発掘調査団　二〇〇二『下田西遺跡発掘調査報告書』
白井久美子　二〇〇四「前方後円墳」『千葉県の歴史　資料編考古4（遺跡・遺構・遺物）』県史一二　千葉県　六二八―六四一頁
逗子市教育委員会・葉山町教育委員会　二〇〇九『国指定史跡長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査概要報告書：（平成18年度～平成20年度）』
諏訪下北遺跡発掘調査団　一九九〇『諏訪下北遺跡』
世田谷区立郷土資料館　一九八四『特別展　多摩川の古墳』
滝沢則朗　一九九二「武蔵における首長墓の変遷」『東京考古』一〇　東京考古談話会　三三―五八頁
竹石健二　一九八八「井田西遺跡」『川崎市史　資料編一』川崎市　三六六―三六九頁
谷川磐雄　一九二五・一九二六「武蔵国橘樹郡箕輪貝塚発掘調査報告（一）（二）（三）」考古学雑誌第一五巻第三号・第九号、第一六巻第四号　日本考古学会　四四―四九頁、六―三一頁、一―一三頁
玉川文化財研究所　二〇〇六『横浜市港北区下組東貝塚』
鶴見区史編集委員会　一九八二『鶴見区史』鶴見区史刊行委員会
新納泉　一九九一「権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』一七六―一八五頁
西岡秀雄　一九三六「日吉臺竪穴住居阯發掘報告（概報）」『史学』第一五巻第三号　三田史学会　一三四―一三八頁
西岡秀雄　一九四〇「日吉臺弥生式竪穴発掘調査報告」『史学』第一八巻第四号　三田史学会　八一―一四一頁

野崎欽五　二〇〇二「弥生時代の影向寺台とその周辺」『地域考古学の展開村田文夫先生還暦記念論文集』村田文夫先生還暦記念論文集刊行会　一五七―一七一頁
橋本増吉　一九三四「日吉臺住居址發掘報告」『史学』第一二巻第一号　三田史学会　一二三―一四一頁
浜田晋介　一九九六「古代橘樹郡の古墳の基礎的研究」『加瀬台古墳群の研究Ⅰ』川崎市民ミュージアム考古学叢書三　三一―五三頁
浜田晋介　一九九七「加瀬台9号墳の調査成果と課題」『加瀬台古墳群の研究Ⅱ』川崎市民ミュージアム考古学叢書三　六六―八八頁
平本元一　一九九九「厚木市ホウダイヤマ遺跡」『第二三回神奈川遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川考古学会　二七―三二頁
広瀬和雄　一九九二「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　近畿編』二四―二六頁
古江亮仁・渡辺久喜　一九五六『川崎市井田伊勢宮金堀横穴群第七号穴調査書』川崎市教育委員会・川崎市立橘高校
北條芳隆　一九九六「雪野山古墳の石製品」『雪野山古墳の研究　考察編』雪野山古墳発掘調査団・八日市市教育委員会　三〇九―三五〇頁
松木武彦　一九九二「銅鏃の終焉―長法寺南原古墳出土の銅鏃をめぐって―」『長法寺南原古墳の研究』長岡京市文化財調査報告第三〇冊　大阪大学南原古墳調査団　一〇一―一一六頁
Munro.N.G 1908, Prehistoric Japan. Yokohama.
三田史学会　一九四三『日吉矢上古墳』慶應義塾大学史学科研究報告
三田史学会　一九五三『日吉加瀬古墳―白山古墳・第六天古墳調査報告―』考古学・民俗学叢刊第二冊
水野順敏・近藤真佐夫　一九八四「諏訪下遺跡」『日本窯業史研究所年報』Ⅲ　四三―四八頁
村田文夫　一九八八「宮内遺跡」『川崎市史　資料編一』川崎市　一五〇―一五三頁
森貞成　一九三三「日吉台古墳及び先史時代住居址発掘記」『史学』第一一巻第二号　三田史学会　一六五―一七〇頁
山梨県埋蔵文化財センター　一九八五『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第三五集）
横浜市教育委員会　一九八四『矢上上ノ町遺跡・矢上上ノ町横穴墓B支群発掘調査概報』
横浜市教育委員会　二〇〇四『横浜市文化財地図』
横浜市教育委員会　二〇〇九『平成一九年度　文化財年報（埋

蔵文化財その二六）』
横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編　一九八六『古代のよこはま』
横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター　二〇〇二『箕輪洞谷横穴墓群発掘調査報告』
和田清吾　一九八七「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第三四巻第二号　考古学研究会　四四―五五頁

写真１　1936年の空撮にみえる観音松古墳

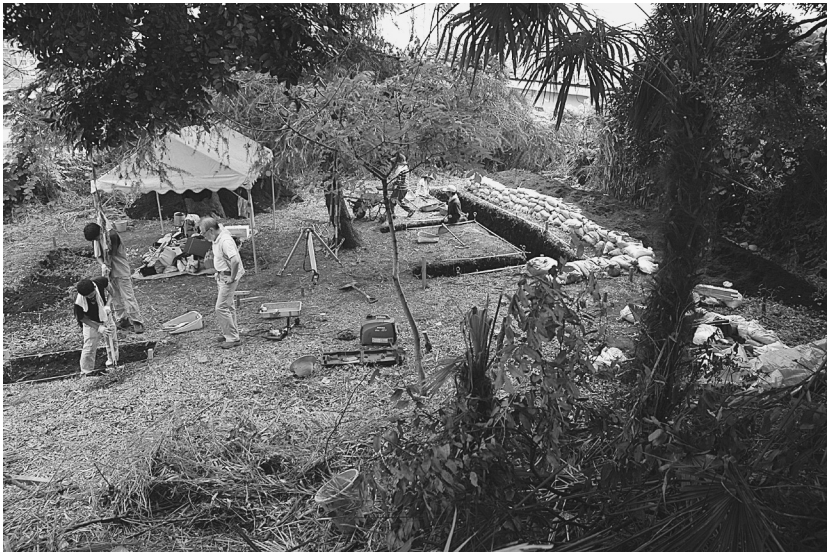


写真２　調査区全景、第２次調査風景

写真３　第１トレンチ全景

写真４　第２トレンチ全景

写真5　第3トレンチ全景

写真6　第3トレンチ深掘区

写真７　第４トレンチ全景

写真８　第４トレンチ土層断面

写真９　第５トレンチ全景

写真10　第５トレンチ２区深掘区

写真11　第５トレンチ４区溝状落ち込み

写真12　第６トレンチ土層断面

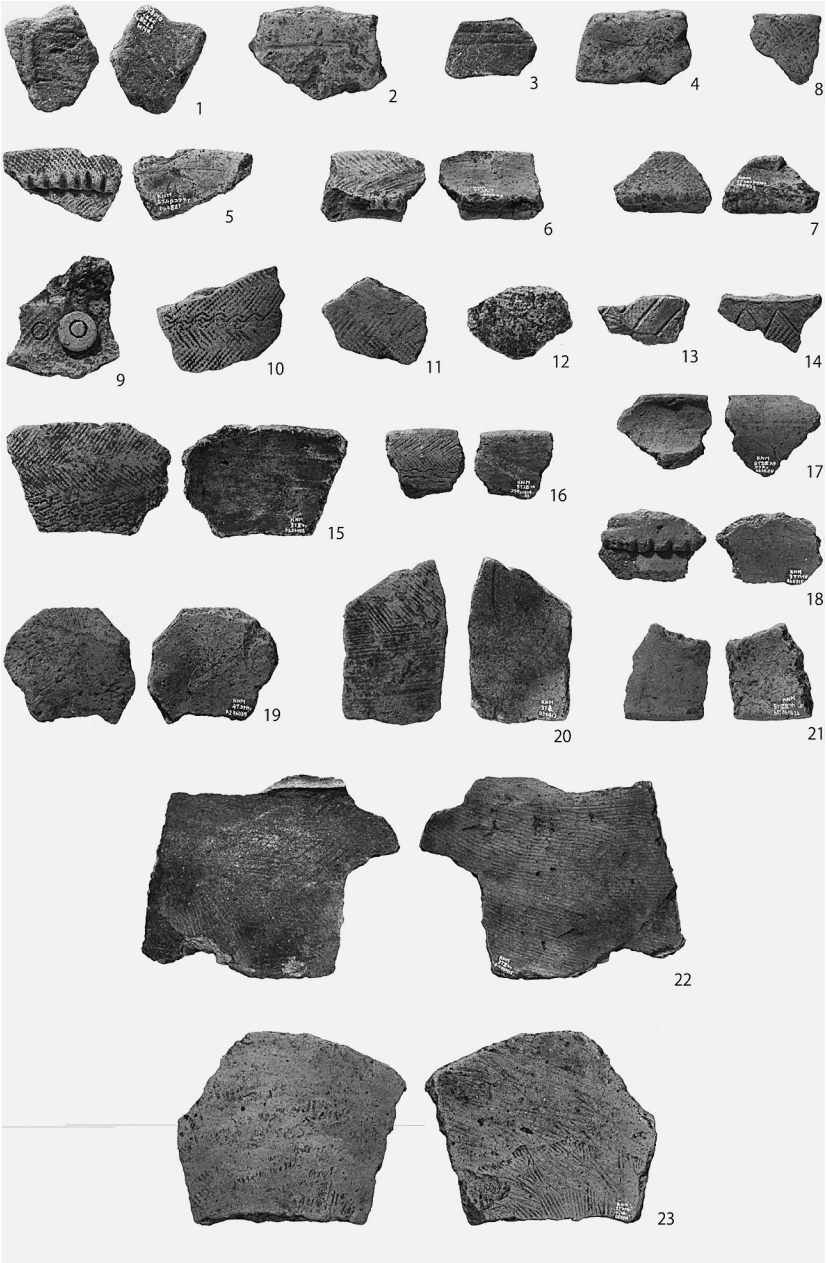


写真13　出土遺物１（約1/3）

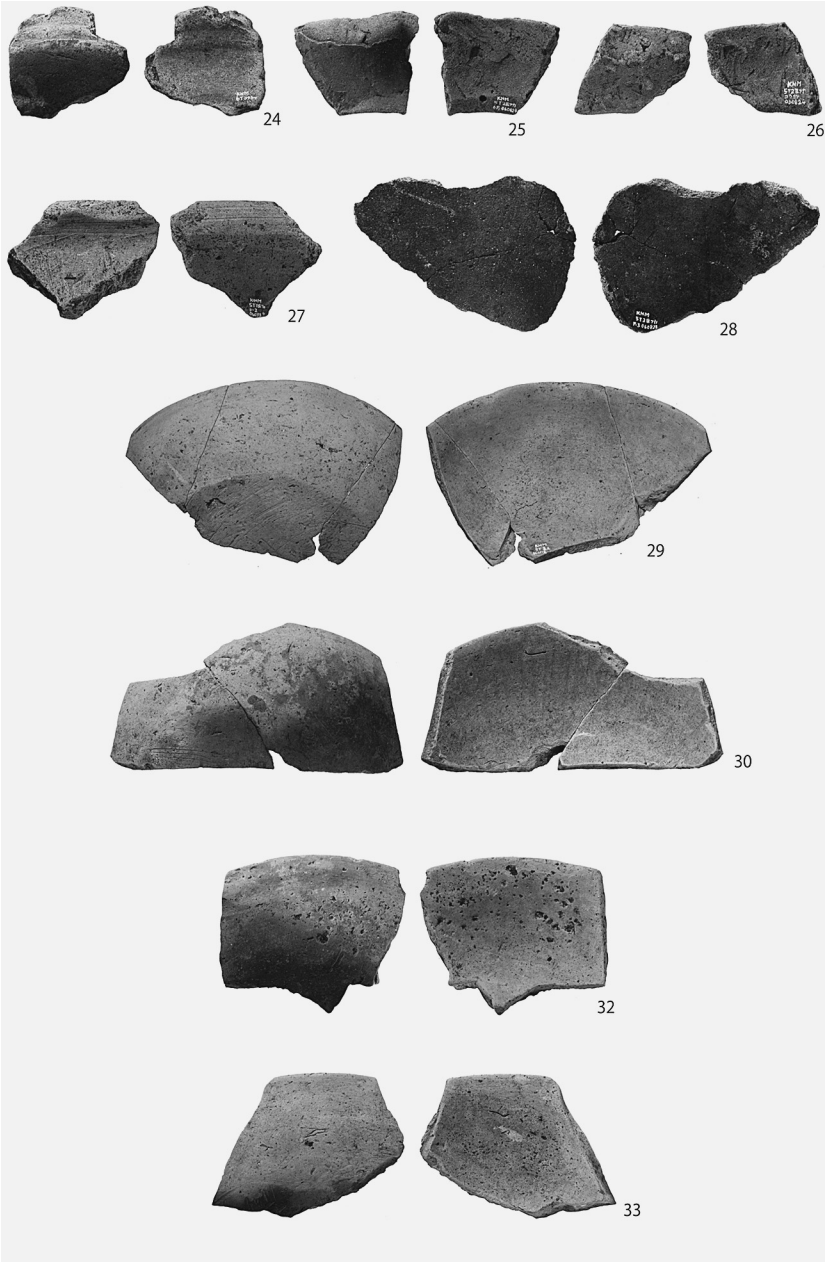


写真14　出土遺物２（約1/3）

報告書抄録

ふりがな	かんのんまつこふんのけんきゅう
報告書名	観音松古墳の研究１
掲載誌名	史学　第78巻第４号
著 者 名	安藤広道
編集機関	慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室
発　　行	三田史学会
所 在 地	東京都港区三田２－15－45
発行年月日	平成21年12月15日

所在遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°　′　″	°　′　″			
観音松古墳（かんのんまつこふん）	神奈川県（かながわけん） 横浜市（よこはまし）港北区（こうほくく） 日吉（ひよし）３丁目14番 慶應義塾（けいおうぎじゅく）矢上（やがみ）キャンパス	14109	港北区 43	35°33′17″	139°39′28″	平成18年 ３月11日～15日 ８月16日～29日	22㎡	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
観音松古墳	古墳	古墳時代	周壕状の落ち込み	弥生式土器・土師器破片	落ち込みは観音松古墳の周壕の可能性が高い。